迫り来る地球の危機

未知の兵器による生態系の破壊に警鐘を鳴らす

各国自由主義陣営要人を狙う スカラー波の正体とは？

科学時代の啓蒙書

JI 特別増刊号

JI
昭和五十四年二月三日第一種郵便物認可
平成九年十月一十四日発行
第二十巻特別増刊号

ＪＩ
＝正法の集い＝
第２０巻　特別増刊号
インターネット公開版

発行日　平成 9年10月24日

電子書籍作成　平成17年 5月 2日
最終更新日　平成18年 1月 3日
作成者　エルアール出版
（旧ジェイアイ出版）

©1997-2006 ALL Rights Reserved 無断引用・転載を禁ず

―絶賛発売中！―

天と地のはざまにて星を仰ぐ―

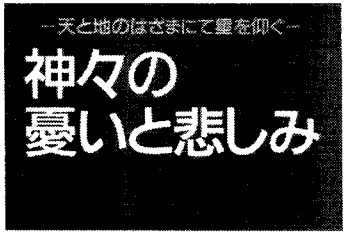
神々の憂いと悲しみ

千乃裕子著／ＪＩ編集部編

私は真理と真実のみを喜び、虚偽と偽善を憎むように、天の神々に育てられました。また、天の至高善と至高の徳のみを唯一の己の資産とするべく、神々に導かれた古代の賢者や哲人、天与の知恵を以て民族の危機を救った賢明なるリーダー達を、心の師として、自ら精神を磨き、向上させるよう天の神々に教え導かれました。

（著者「あとがき」より抜粋）

定価（本体2719円＋税）



表紙写真：ＪＴＢフォト

はじめに

私達千乃正法グループは、昭和五十二年、創始者千乃裕子会長の下に発足、以来一貫して反社会・共産主義、反宗教（真のキリスト教、真の仏教は是とする）を掲げ、啓蒙運動に邁進して参りました。

特に政治問題に関しましては、反社会・共産主義、自由主義擁護の立場から、本誌『ＪＩ』等を通じ積極的言論活動を展開、また、国外へ向けては、旧ソ連にて捕らわれの身となっておられた自由の戦士サハロフ博士、オルロフ博士始め良心の囚人の方々の解放に向けた運動を行ない、自由陣営の旗頭、米国にも必要あれば強力に働きかけるなど、その実績は（ボランティア活動としては）日本は疎か世界有数の自由陣営堅持を標榜する団体として、その信条を源とする実働を行なって参りました。

当グループは、税優遇措置を逆手に取り私腹を肥やしたり、人心を堕落させるに至る宗教諸氏を否定し（オウム真理教等は論外の世の敵）、依って当グループは宗教法人ではなく、純粋なる啓蒙運動団体として、任意会員自らが精神の向上に努めており、教会や神社仏閣のような建造物を持たず、礼拝祈祷も存在しておりません。

反社会・共産主義運動には、千乃正法に従い会員挙って一身を賭す覚悟で徹底的に展開して来ており、特に、千乃会長は極左過激派、日本共産党、朝鮮総連、日本社会党、北朝鮮、中国、旧ソ連、左傾マスコミ等の悪を撤抉、容赦なく徹底して叩き続けて来られました。

このような運動（戦い）を展開している最中、明らかに右記共産圏諸国と日本共産党系列全国組織（民青、民医連他）との連携の攻撃と思われる形の災厄が千乃会長に降り掛かり、永年に亙る種々の文献資料の探究、状況証拠の分析の結果、その攻撃は前記陣営からの電磁波を応用したスカラー波個人兵器によるものであることをつきとめ、防御をしなければ千乃会長の生命に関わることとなり、その防御と対応策の開発に不可欠な現在のキャラバンとよばれる攻撃を避けるための移動を強いられることに至ったものでございます。

スカラー波は、通常の電磁波と違い簡単に遮蔽できるものではありません。ただ電磁波の有害性に関しましては、

最近、携帯電話の出す電磁波による医療機器への障害をきっかけに、人体への影響もふくめた電磁波の被害について、郵政省をはじめとする関係省庁もさすがに重い腰をあげざるを得なくなっております。平成二年の電気通信技術審議会による答申――「電波利用における人体の保護指針」がいままでは、自主規制のガイドラインのたたき台にしかすぎませんでしたが、九七年より郵政省は、「電波環境課」を新設、労働省は、実験による本格研究に乗り出す。通産省は電磁波対策を電気製品に対し行なう企業を助成することを決定するなど、国家レベルでやっと電磁波問題が、真剣に検討されはじめたようです。

先進国で人体に対する電磁波の基準が遅れている日本において、その悪用を規制する法律がいちはやく施行されることが望まれます。そしてスカラー波を使った特殊兵器の問題に国政を司る諸先生、科学界の識者が目をむけ、そして、千乃会長が時代を先取り提唱した「左翼ゲリラによるスカラー兵器を使用したテロ」――この事実が、世の中に認知され、自由主義社会が存続していくことを私達は目指しております。

スカラー波に関しましては、悪用されれば、心身の侵害とコントロール、物質の破壊を密かに然も自在に操り得る先進テクノロジーとして、欧米諸国では大きな問題となっており、特に米国に於いては、その膨大な文献資料が既に一般に刊行されております。残念ながら我が国におきましては、この分野での研究及び法的対策は著しく立ち後れて居り、人類の善なる生存と国体の命運をも危うくする喫緊の大災厄が未だ重大問題として認識されず、放置の状態におかれているものでございます。

その危機的状況に一矢報いるべく、本誌増刊号では、いままで発刊されたJI誌の中から、千乃会長の手記「神々の憂いと悲しみ」、スカラー波に関する科学論文、またスカラー波の伝播媒体ともなっている送電線等の問題について特集いたしました。

科学時代の啓蒙書『JI』発行人

有宮基観

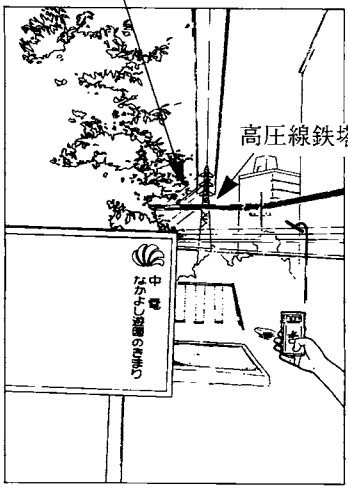
目次

はじめに……有宮基観……1
神々の憂いと悲しみ……貴巌幹子……4
違法工事写真・スケッチ……111
科学トピックス・電磁兵器最先端……諸星紀美子……146
身近に迫ったスカラー波、電磁波による環境破壊……小賀竹留……200
一、身近になったマインド・コントロールの恐怖／二、低周波磁気に被曝している現実／三、電流を互いに逆の二方向に流した時に発生する重力子の説明／四、スカラー波の原子内部での性質についての一考察／五、スカラー波が消えれば海も山も甦る／六、地球が放射している重力波について／七、今度のエルニーニョは、地球環境の崩壊の始まり？
重力子とは……池岡克致……242
スカラー波と人体について……大岡　広……266
パラダイムシフトを起こす……水谷俊夫……275
カナダで起こっている水鳥の不思議な大量死について……小泉万馬……279
送電線等工事の違法性について……283

違法工事写真・スケッチ

愛知県名古屋市

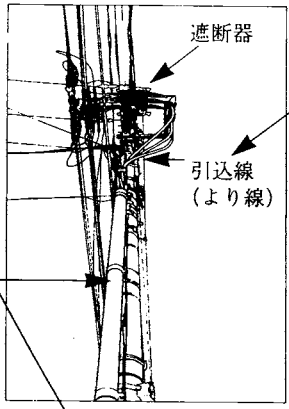
電線の交差箇所は高い電磁波が出ることが多いので注意！

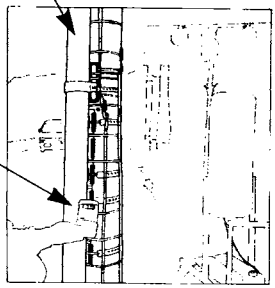


電磁場測定器（高圧線下遊園地）

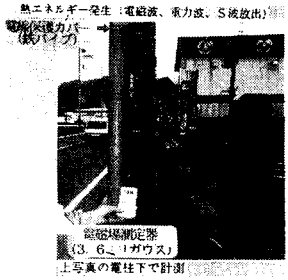
地表 ……	2.6ミリガウス	
地上0.5m……	2.6	〃
1m……	2.8	〃
1.5m……	3.0	〃

広島県東城町



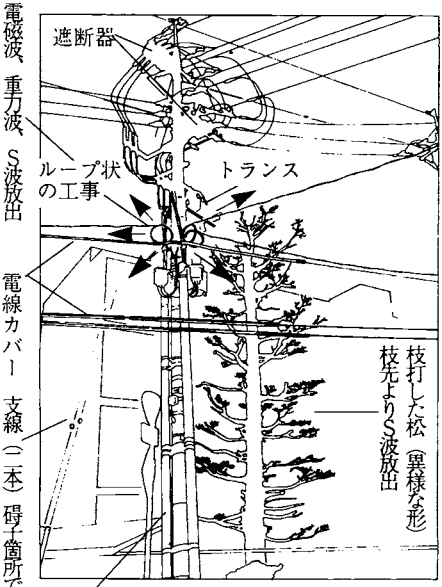


上図電柱下で計測



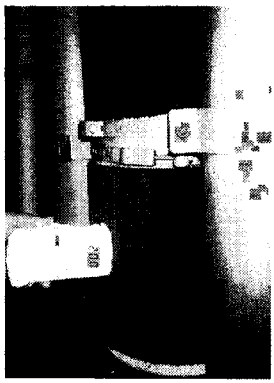
上写真の電柱下で計測

広島県東城町

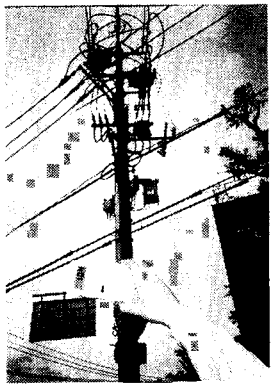


２０ミリガウス
（電柱真横）

この位置での電磁場は
１０.４ミリガウス



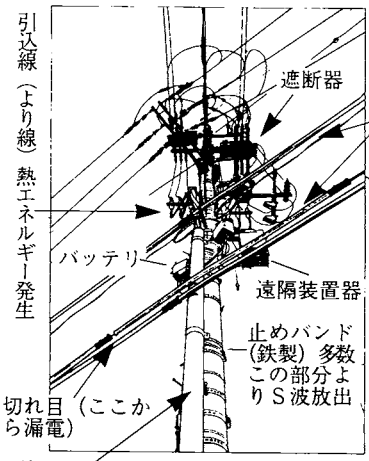
電磁場測定器
（２０ミリガウス）

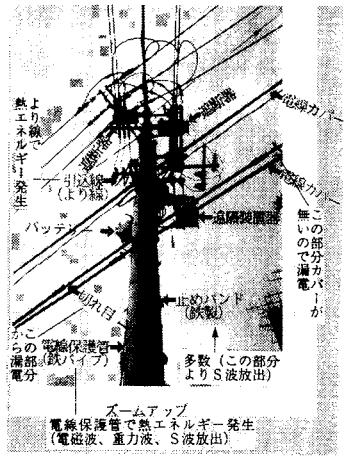


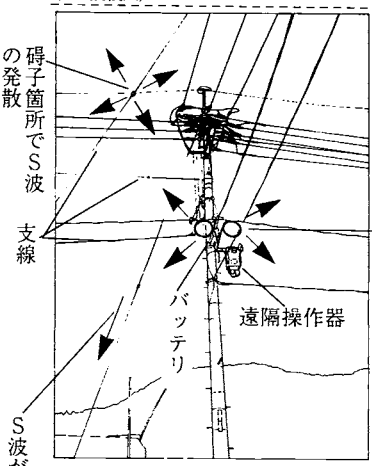
電磁場測定器
（１０.４ミリガウス）

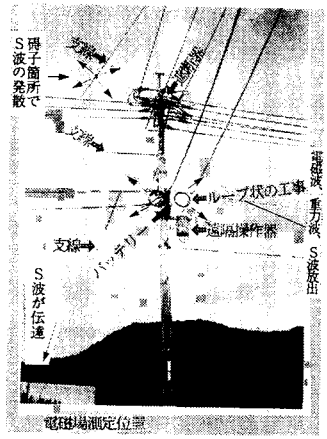
電磁場測定器
（１５.１ミリガウス）

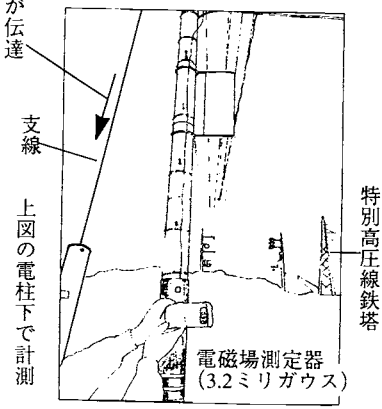
広島県東城町

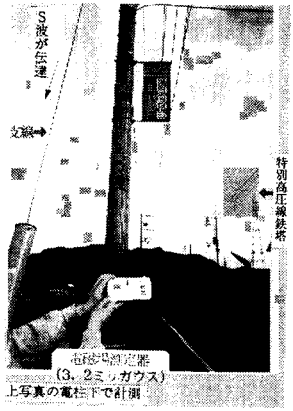

引込線（より線）熱エネルギー発生
遮断器
電線カバー
この部分カバー無いので漏電
バッテリ
遠隔装置器
止めバンド（鉄製）多数この部分よりＳ波放出
切れ目（ここから漏電）
電線保護管（鉄パイプ）熱エネルギー発生（電磁波、重力波、Ｓ波放出）

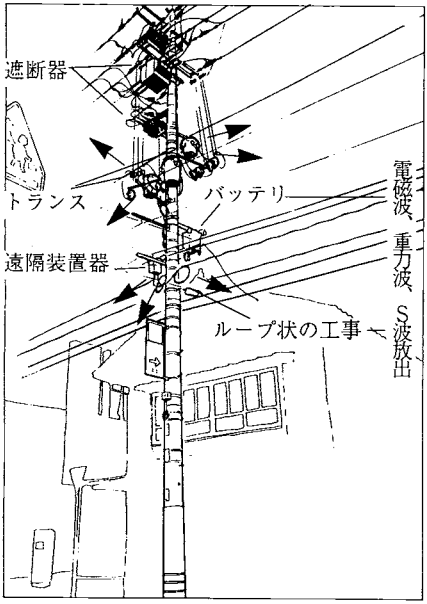

より線で熱エネルギー発生
遮断器
電線カバー
引込線（より線）
遠隔装置器
この部分カバーが無いので漏電
バッテリ
切れ目
止めバンド（鉄製）
この部分から漏電
電線保護管（鉄パイプ）
多数（この部分よりＳ波放出）
ズームアップ
電線保護管で熱エネルギー発生（電磁波、重力波、Ｓ波放出）


碍子箇所でＳ波の発散
ループ状の工事（電磁波、重力波、Ｓ波放出）
支線
遠隔操作器
バッテリ
Ｓ波が伝達


碍子箇所でＳ波の発散
支線
ループ状の工事
遠隔操作器
電磁波、重力波、Ｓ波放出
支線
バッテリ
Ｓ波が伝達
電磁場測定器


Ｓ波が伝達
支線
上図の電柱下で計測
特別高圧線鉄塔
電磁場測定器（3.2ミリガウス）


Ｓ波が伝達
支線
特別高圧線鉄塔
電磁場測定器（3.2ミリガウス）
上写真の電柱下で計測

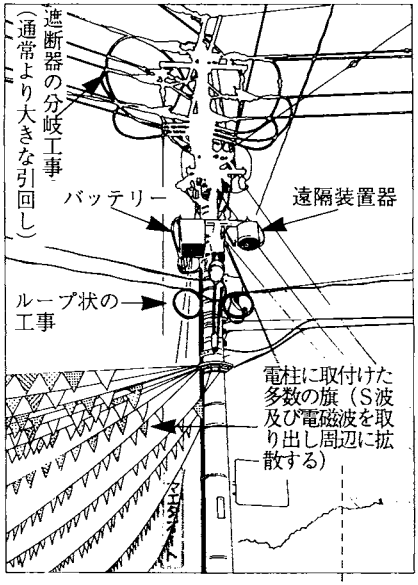


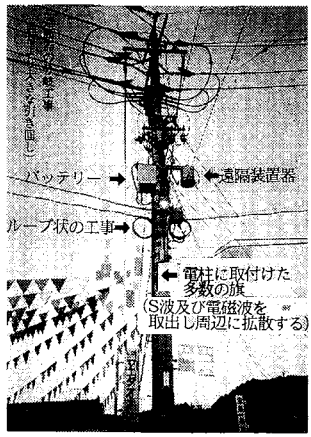
広島県東城町

電柱の真下で測定

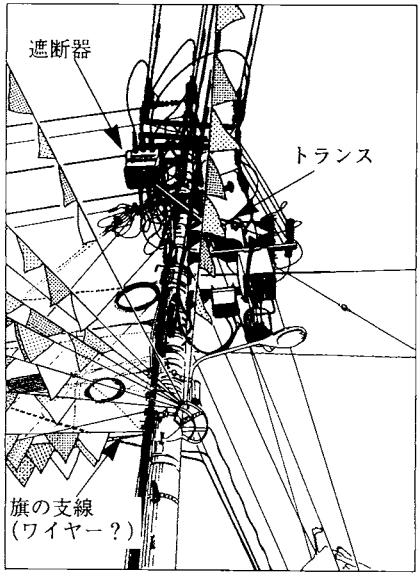
電柱より離れて測定

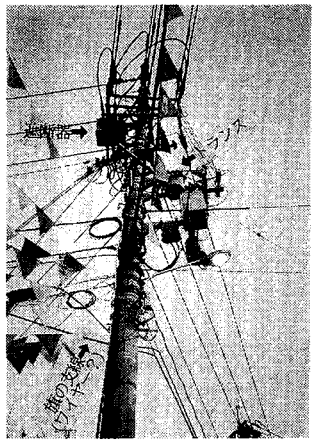
広島県東城町





（個人の業者が広告用の旗を異常に多く電柱に取り付けるなど、今迄見たことがない。恐らく左翼シンパでしょう！　千乃）

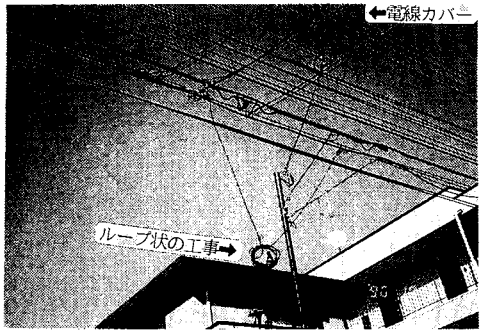


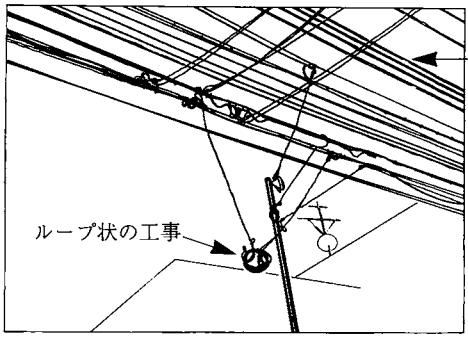


電磁場測定値
（1．4ミリガウス）

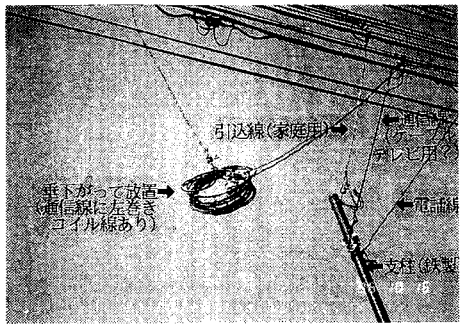
兵庫県西宮市

電磁場測定値
(0.8～1ミリガウス……
但し、写真中のループ工
事撤去後の参考測定値)

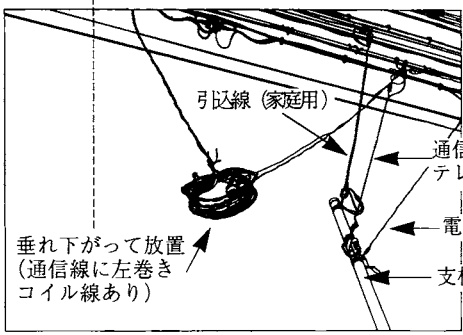




ズームアップ

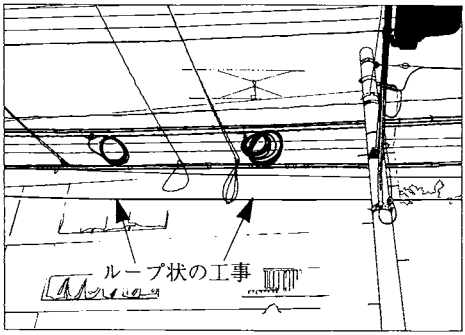


(完全な違法工事。
S波拡散工作は明らか。)



(従来はコンクリート製なのにわざわざ鉄製を選ぶのは更に磁界と漏電を強化する工作！　千乃)

神奈川県川崎市

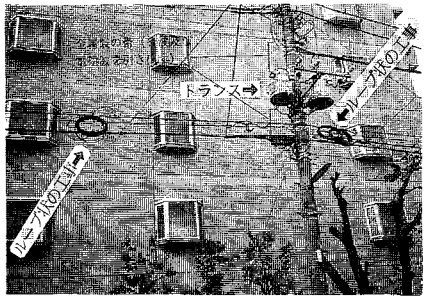


（ループ状工作部より熱エネルギーが放電
→Ｓ波照射時に周辺にＳ波を拡散）

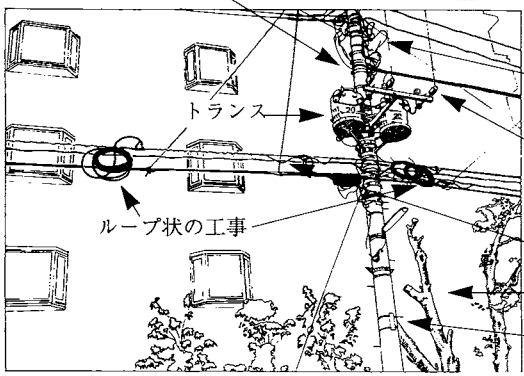
写真下付近で計測

電磁場測定器
（１．１ミリガウス）

電磁場測定値
（０．７ミリガウス）



全く不要であるのに取り付けられた、不当に多すぎる金属製の帯
（Ｓ波及び電磁波を引き出す）



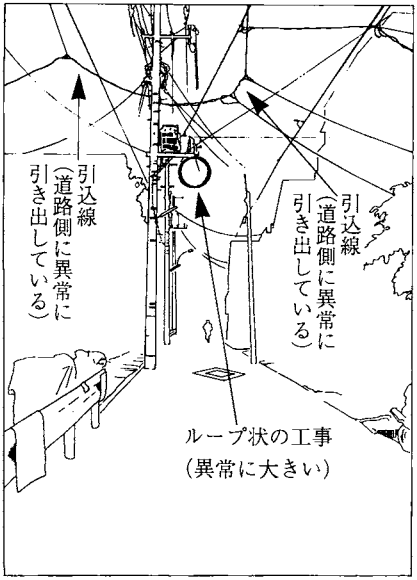
不自然なコード（？）の形状。
分岐工事？

碍子の外側に露出した裸線。
故意に漏電を計るもの。

故意にたぶらせた電線

ここにも異常な枝打ちの松？

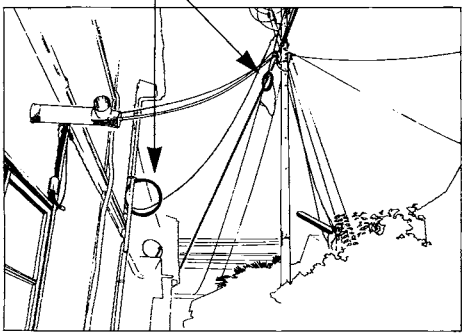
用途不明の金属製品

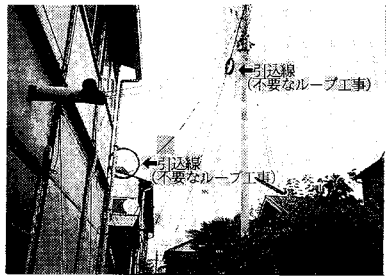


神奈川県川崎市

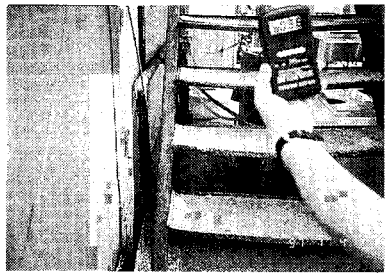
写真下付近で計測

電磁場測定器
（1．8ミリガウス）



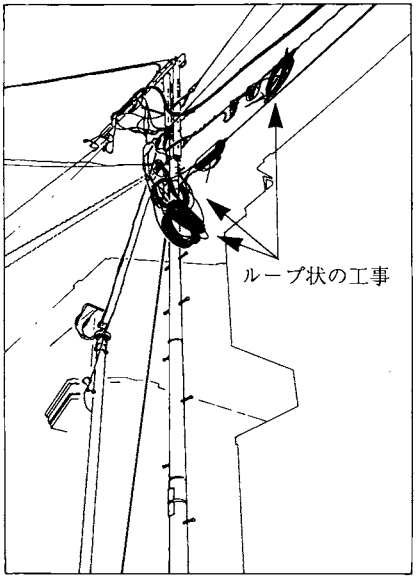


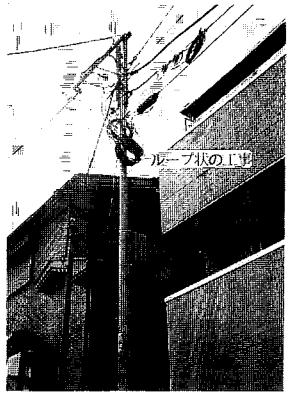
写真下付近で計測

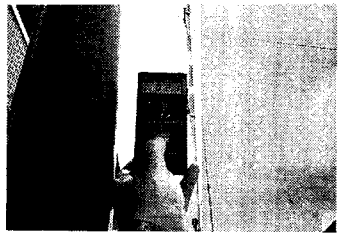


電磁場測定器
（3．6ミリガウス）

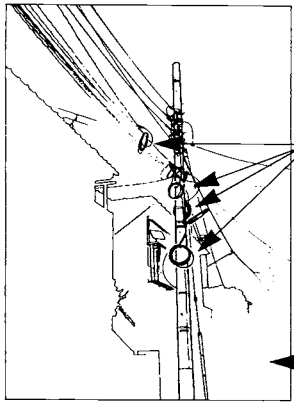
神奈川県川崎市







電磁場測定器
（2．1ミリガウス）



ループ状の工事
（多重に巻いたループ状の工作を多く設け、放電量を増やす）

電磁場測定値
（0．7ミリガウス）

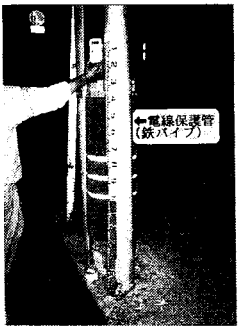
恐ろしいような違法配線工事で、到底人間が側に住めるような場所には見えません。WHOの係員に是非見てもらうべきです！　横はマンションかアパートで、全室の汚染を計り、空中放電量を増やす工作に見受けられます。S波を各電柱に向け発射すると、総て漏電回路に従って、人であれ、物であれ、土地であれ、瀧の如く、原爆の〃死の灰〃の如く降り注ぐような仕掛けです！

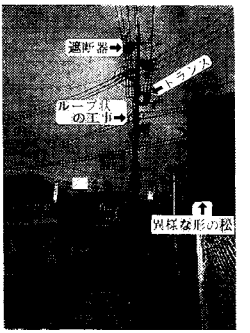
（千乃）

広島県東城町（アパート横の電柱）

〔Ｐ１１２掲載の場所……スケッチも併せてご参照下さい。〕

電磁場測定値
地上1.5m
…183.2ミリガウス



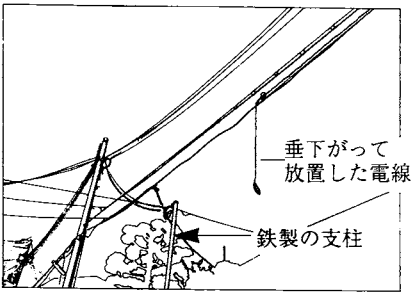


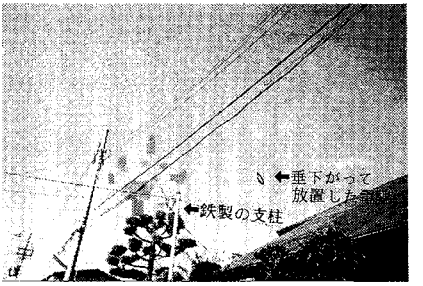
（註）これで静岡県掛川市の谷川池や梅の谷池の大量の魚の死亡は、鉄塔からのＳ波侵入だとはっきりしました！　だからＳ波漏電が魚や虫、鳥を殺すんです！人間もね！　（人間、虫、鳥など大気中の生物は低酸素血症で－。）

しかし広島県東城町のアパートの住人は何人生きておられますかねえ？　地上１.５ｍの所で１８３.２ミリガウス！　信じられない数値です！　戦友会の人達だったりして－。いずれにしろ、変な所は早く引っ越すことです！　生命あっての物種ですから－。

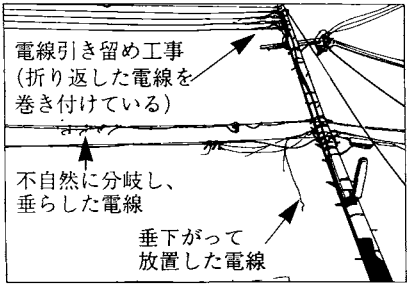
いかに日本人は周囲の出来事や変化に無関心で暮らしているかということですねえ－。桑原、桑原！　（千乃）

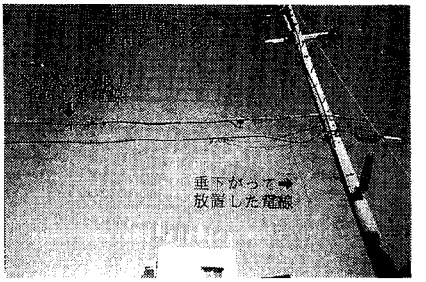
兵庫県西宮市





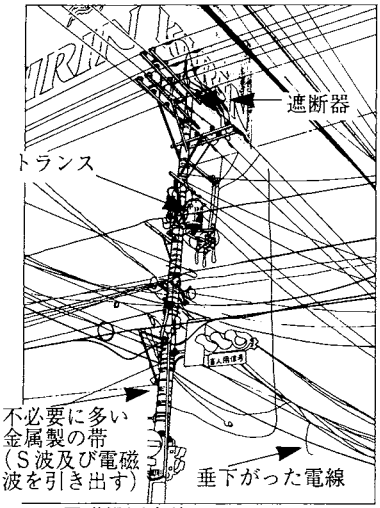
電磁場測定値　地上1.5m…1.0ミリガウス

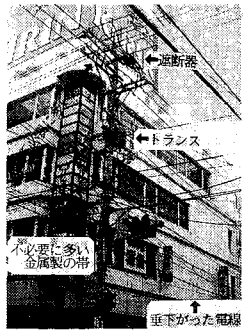




電磁場測定値　地上1.5m…1.0ミリガウス

青森県八戸市





ズームアップ

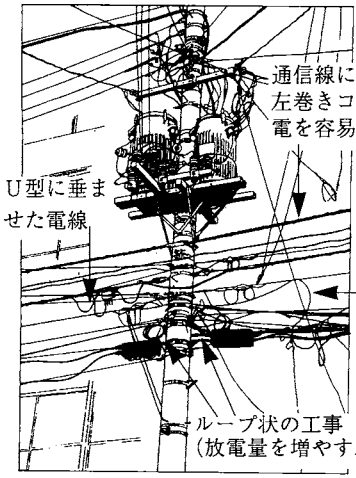
電磁場測定値

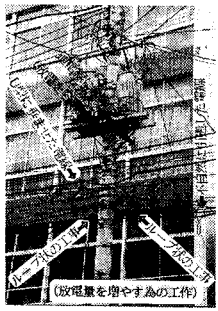
地上0ｃｍ……0.5ミリガウス

50ｃｍ… 0.7 〃

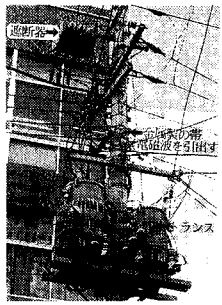
1m……0.7 〃

1.5m…… 0.8 〃





ズームアップ



電磁場測定値

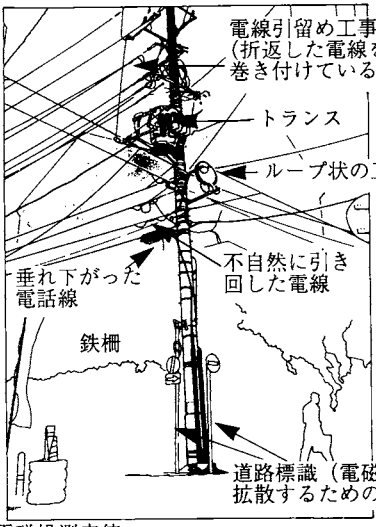
地上0ｃｍ……1.3ミリガウス

50ｃｍ… 1.3 〃

1m……1.4 〃

1.5m…… 1.6 〃

神奈川県川崎市



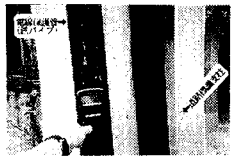
電磁場測定値

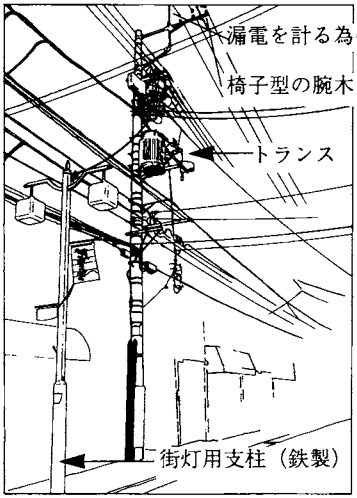
地上0ｃｍ……10.4ミリガウス

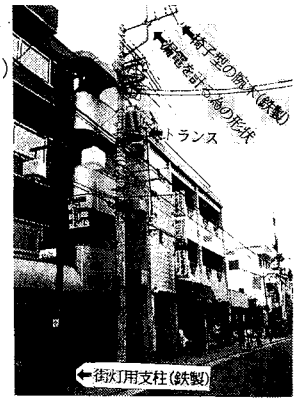
50ｃｍ… 15.6 〃

1ｍ……15.6 〃

1.5ｍ…… 15.8 〃







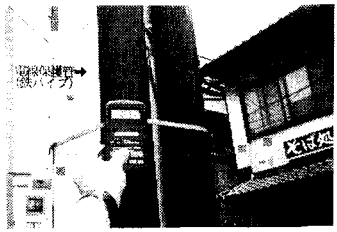
電磁場測定値

地上0ｃｍ……5.3ミリガウス

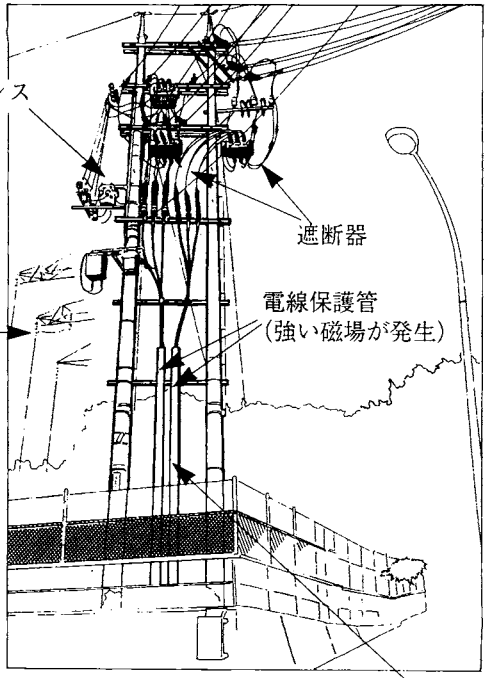
50ｃｍ… 5.6 〃

1ｍ……5.6 〃

1.5ｍ…… 6.2 〃



広島県安芸郡音戸町先奥（電柱No音戸幹1）



このタイプの電線管は送電線が、より線となって入っているため電磁場が高い値を示すようです。

電磁場測定器

地表 …… 11.4ミリガウス
地上0.5m…… 13.2 〃
1m……14.8 〃
1.5m…… 15.5 〃

※　この写真付近では最近家族の方が相次いでお二人亡くなったと聞きました。〔地表11.4ミリガウス（地上1.5m15.5ミリガウス）でお二人亡くなられたのであれば地上1.5mで183.2ミリガウスだの200ミリガウスでは想像を絶します!!　千乃〕

科学トピックス

電磁兵器最先端

諸星　紀美子

（一）

先日、Ｙさんから電話があり、その中でＴＶでおもしろい科学ドラマ（ＢＬＡＣＫＯＵＴ）を放映するとの情報を得た。深夜で、しかもＴＶ朝日であった為、とまどいつつ見た（一テーマを二回で完結する形式で、最先端科学犯罪を、警視庁の科学捜査課〔仮称〕が、扱うといったストーリーである）。私が見たのは、どうやら第一話であったが、なんとプラズマ兵器による連続殺人事件だった。大槻教授が登場し、某国でのプラズマ兵器開発や、携帯プラズマ発射装置についてコメントしている（このプラズマとは、複数の高周波の交差によって発生する。もともとこの現象を米国のベアデン〔スカラー波提唱者〕が注目し、旧ソ連の最新兵器と指摘したのである）。

この連続殺人事件は、日中突然人が焼失するといったもので、犯人は、パソコンネットで情報を得た小学生であり、気象衛星のデータベースに侵入し、プラズマ発射最適気象条件を割り出して、一般人を光センサーによってターゲティングし、攻撃するといった衝撃的な内容だった。

このプラズマ兵器は、宇宙人ユミットをして、核兵器を凌ぐ最終兵器であると警告を受けている。最近では、オウムが、レーザー兵器開発と並行してプラズマ兵器開発も行なっていたらしく、にわかに電磁兵器が脚光を浴びるようになってきた。先のドラマを見て、そのリアリティから、

ついにこういう時代になったかと思う。ただ言うまでもないが、私たち正法を学ぶ者が、注意しなければならないのが、こういった電磁兵器が左翼陣営の手中にあり、今もって大いなる野望達成の手段として用いられているこの事実である。

その意味でプラズマ兵器、またはベアデンや、マトリックスⅢ（スカラー波を非ヘルツ波として紹介している書物）を取り上げる日本の研究者（飛鳥氏、実藤氏、木下氏等）は、リベラルであったり、新興宗教関連者だったりと私たちにとっては、たいへん残念である。

だから尚さら時代に先駆けて、スカラー波攻撃による被害を、思想犯罪というカテゴリーで警鐘してきた第一人者が千乃先生であることを改めて感じさせられた。

（九五年十一月）

（二）

前回の科学トピックス掲載後、Yさんよりいくつかの情報提供を受けた。そのなかに、プラズマ兵器開発に関する新聞記事があった。大変興味深いものなので、今回はそれを紹介しようと思う。

ロシア　戦略ミサイル迎撃兵器―米に共同実験提案へ

エリツィン・ロシア大統領は三日からカナダ・バンクーバーで行なわれる米ロ首脳会談で、極秘裡に開発されたロシア製兵器「プラズマ・ビーム砲」を用いての戦略ミサイル迎撃実験を米ロ合同で行なうようクリントン大統領に提案する見通しである。

イズベスチア紙が一日報じた。「トラスト（信頼）」と名付けられた迎撃実験は、エリツィン大統領の呼びかけに基づき昨年から米ロ共同研究が始動した「対限定ミサイル攻撃防衛網（ＧＰＡＬＳ）」構想の一環として提起される模様だ。

同紙によると、ロシア側は、米戦略防衛構想（ＳＤＩ）枠内のミサイル迎撃実験が行なわれた太平洋のクエゼリン環礁を実験拠点に見込んでいる。陸上基地、洋上のエネルギー発生装置から高度に集積したプラズマを〝弾丸〟として発射。飛来するミサイル弾道を高度二〇～五〇キロで破壊する。

この計画には、かつて核弾頭製造に携わった秘密都市アルザマス16の「実験物理学研究所」など各軍事技術開発機関が参画している。同兵器開発で「先行している」ロシアが主要部分を担当、米国には資金のほかコンピューター技術の提供を要請したい意向だ。

ロシア側は、この兵器の開発が「既に屋外実験の段階に達している」とした上で、米ロ合同で開発すれば米国独自開発の場合に要する費用の百分の一（三億ドル）で済む、と主張している。

旧ソ連軍部が、エネルギー密度の極めて高い、電離した高温ガスであるプラズマの兵器利用に取り組んでいた事実は早くから知られていた。だが、「プラズマ・ビーム砲」の開発がどこまで進んでいるかは未確認。（後略）

（『読売新聞』平成五年四月二日朝刊より）

（補足：『産経新聞』平成五年四月三日朝刊にも同様の記事あり）

（三）

戦略上、敵に対しその施設、人命等への被害を最小限にとどめ戦闘不能にさせる目的を達成するのがノンリーサルウエポン（非殺戮性兵器）である。

それは多種に及ぶが、そのなかで、電磁兵器関連からみ

日本の三大紙の国際面に堂々とこのような記事が掲載されていたこと自体驚きに値するが、旧ソ連時代から既にプラズマ兵器を所有していた可能性が高く、世界の共産化に一役買っていたかもしれない。

ここにきて多くの読者の方は次のように感じているだろう。

『なるほど、プラズマ兵器については、その現実性が分かってきたが、今千乃様を攻撃しているスカラー兵器との関連は？』

これについては、次回触れようと思うが、ここでキーポイントになるのは、リーサル・ウエポン（殺戮性兵器）とノンリーサル・ウエポン（非殺戮性兵器）の境界、もうひとつはマックスウェルの電磁方程式にある、距離の二乗に反比例して減衰する電磁波とそうでないもの、この二点である。

（九五年十二月）

れば、マイクロウェーブ兵器、電磁パルス兵器、低周波発生兵器があげられている。これは主に機器類の制御部品にダメージを与えるが、マイクロウェーブは、人体に発熱をおこすことが確認されている。低周波発生器においては、建造物を通過し、内部の人間の生理現象に不調を与え、戦意を喪失させる。

では、千乃先生に対する攻撃を考えてみよう。もし、これら電磁兵器で攻撃するならば問題が起こる。第一に発生出力の問題（かなりの電源が必要）、第二に電波管理法の問題、第三に発射照準の問題（遮蔽物）、第四にシールドが、比較的容易であることがあげられる。千乃先生に対する攻撃も当初は、この電磁波対策が検討され電磁シールドが使用されたということだが、無効に終わっている。その後、天からの示唆とそれを受けた小賀様の尽力で攻撃の正体が明らかになったとYさんから聞いている。Yさん曰く「敵の目的は、証拠を残さず、先生を暗殺することである。それは回りに悟られず弱い毒をもって、少しずつ体を弱らせて殺すような完全犯罪を狙っている。そのために、社会的に凶器とは認知されてないものを使用することが必要となった。」まさに社会に凶器と認知されていないもの、これがスカラー波発生器なのである。これはテスラーが浸透性の強い電磁波として扱ったといわれるいわゆるテスラー波、このあたりに端を発するといわれ、旧ソ連がいち早く研究開発に着手したと言われている（そのことは、近年米国の科学者が、ロシアのアルザマスにある研究所を訪問した際にもそれらの研究が進んでいることを確認している）。ここでスカラー波発生器そのものに深く触れることは今回は避けることにするが、敵が扱っている攻撃手段は、その目的上ノンリーサルウエポンであり（致死性兵器使用の場合は事件性を帯びてしまい目的が果たせない）、対生物兵器であり、現在の電磁兵器のカテゴリーにまだ登場していない極秘兵器である。

これが各国要人への攻撃に使用されているとの警鐘を千乃先生がなされたが、まさにそれは、今後拡大していくだろう。真実を叫ばれる先生の御存命中にこのスカラー波攻撃の問題が、社会に正しく認識されることを願いたい。

〔いままで紹介してきた実用段階にあるプラズマ兵器は、その性質上致死性兵器であり、対戦闘機器を主体にしている。その発射には、大出力の高周波ビームを必要とし、プラズマの発生には一億ワット／㎠以上の出力密度、一〇―一〇〇〇ジュール／㎤以上のエネルギー密度を必要とすると言われる。プラズマ状態のなかで多数の電磁波が交差してお

り百八十度位相がずれた電磁波が重なると打ち消し合って現代物理では、ゼロの状態であるとしているが、ベクトルではなくスカラー（量）として存在すると欧米の研究者が指摘した。スカラー波発生手段はこのほかにも存在するとされている（S波の搬送波が電磁波であると言われることや、S波そのものからの二次放射が電磁波であるため、S波発射に関して電磁波との関連については充分考慮に入れる必要がある）。プラズマ兵器の場合は副次的にスカラー波が発生しており兵器としては、その熱量や発生時に生じる爆風によってダメージを与える。」

参考文献　殺さない兵器　江畑謙介（光文社一九九五年）

（九六年一月）

（四）

前回の内容に思いもよらず、天上界からコメントをいただいて、攻撃のあり方についてその洞察と分析の深さに出る言葉も失ってしまった。今後いかなる方向でこのシリーズを進めていこうかと、悩んでいたが、ちょうどその頃編集部から連絡があった。「離反者からの手紙が先日JI出版に届きまして……その中で〃諸星氏のマインド・コントロールがとけてこんなばかな原稿（電磁兵器最先端）を書かないよう願いたい〃と書いてあります。このような訳ですので今回も頑張って下さい。原稿お待ちしております。」

ますますプレッシャーがかかってしまったが、幸いにもYさんより、おもしろい資料が送られてきたので、今回はそれを紹介しよう。

高圧線下でミステリーサークル発生

情報源は、ミステリーサークル研究者からのものだが、日時は一九九一年六月二十八日、場所は北海道滝川となっている。発生状況は、高圧線下の麦畑で、丸いオーソドックスなミステリーサークルである。麦は元の高さ八〇cmで、サークル内では倒れて反時計回りに渦を巻いている。麦は

折れるのではなく、曲がっていたという。

地元新聞に載った近くの高校物理教諭のコメント

「高圧線の影響で、静電気による空気のイオン化が起こり、プラズマ現象（注）が起きた可能性がある。」

研究熱心なる読者は気付かれたと思うが、これは、天上界が先月のJI誌で示唆されたことと関連している。巧妙なるプラズマ致死性兵器への警告を改めて認識する必要があろう。そして、敵のアンテナ工作に断固立ち向かい、社会問題として提起しなければならない。

今後も私達は、このように千乃先生を通じ、天上界からの御指導のもと問題解決へ一歩一歩進んでいくのである。

（注）プラズマの発生のさせ方と環境次第で、サークルが発生することが、シュミレーションによりわかっており、それに基づく見解と思われる。

（九六年二月）

（五）

スカラーとは方向を持たない量を意味し、ベクトル（方向を持った量）の対義語である。スカラー電磁理論において、スカラー波は、ポテンシャル（潜在的）電磁波として扱われている。

スカラー波を理解するうえで、スカラー電磁理論提唱者トーマス・E・ベアデンの存在はさけて通れない。

今回は一九五〇年代から、モスクワの米大使館でおこった旧ソ連による、電磁波照射事件や、ベアデンの主張を紹介し、スカラー波による対生物戦の片鱗をのぞいてみたい。

電磁波攻撃に晒されたモスクワ米大使館

一九五二年にモスクワの米大使館で、マイクロ・ウェーブを利用した盗聴装置が発見された。これは共振現象を利用したもので、金属カプセルにマイクロ・ウェーブを当てて共振させ、不可聴性周波数（二三〇メガヘルツ）を発生させる。それを受信機で取り出して盗聴しようという仕組みである。……カプセルはソ連から米国に贈られてモスクワの米大使館に掛けられてあった米国の紋章（白頭鷲をあしらったもの）の中に、埋め込まれてあった。それを発見

した米国は激怒して、国連にその紋章を持ち込んで抗議したが、今日ではこのような盗聴手段が行われているかどうかを探知できる装置が開発されている。……

このモスクワの米大使館はソ連の盗聴作戦の一大標的とされたが、一九六〇年代初めには、大使館の反対側のビルから電波が大使館に向けて照射され始めた。電波照射は一九七九年まで続いて米国の抗議により停止されたが、その目的についてはいまだに明かになっていない。……

――『殺さない兵器』（江畑謙介）

この資料の最後に「その目的がいまだに明らかになっていない」とされているが、ベアデンによって、まさにこれがソ連のスカラー電磁兵器の対生物戦へのプロローグとみなされている。次にベアデンのこの事件にたいする見解をみてみよう。

モスクワの米大使館職員をターゲットに

五〇年代の初期には、ソ連はモスクワのアメリカ合衆国大使館に、合衆国大使を目標に定めて、弱いマイクロ波照射を始めた。これは、アメリカ合衆国の注目を最高のレベルで浴びること保証付きの事件であった。目的は、新たな技術でアメリカを刺激し、大使館側でどのような反応をするかを見るためのものであった。つまり、大使館での私たちの技術的な反応を見ることによって、私たちがWhittaker Kaznacheyev電磁誘導性疾病などについて知っているかどうかを「大使館への刺激」を通しソ連は知ることができたのである。私たちのスカラーに対する対応が完全に欠落していたため、私たちは自分たちが通常の外部的電磁場のみについてしかまだ知らないということを、ソ連政府に明確に示したのである。私たちは、その決定論的内部構造が細胞生物学的情報を構成している包含電磁Whittakerポテンシャル波について全く知らなかった。この隠された場の情報内容とは、三人の大使を含む大使館職員全員に特殊な疾病を発生させるためのものであった。

（注）Whittaker波、Aharonov-Bohm効果、および隠された変数―Whittakerの一九〇三年論文は現代量子力学の（Bohmの）隠された変数理論（HVT）に先立っている。一九〇四年のWhittaker論文（これは遠距離においてすらスカラー電磁気ポテンシャルの干渉が電磁気力を作り出すことを示したもの）もまた、AharonovとBohmの生産的な一九五九年の論文に先立っている。これは、電磁場力

の全く存在しない中で、Whittakerのスカラー干渉計効果に関する彼らの予言といったものや、力場についてよりも、むしろ電磁気ポテンシャルについてを第一としたものであった。

―『Grabitobiology(1991)』（トーマス・E・ベアデン）

ではなぜ当時の米国がソ連の意図に鈍感であったのか、その根拠について、ベアデンは次のように述べている。

ソ連の電磁生物戦にたいする技術的根拠

国務省、DoD、CIA、DIA、FCC、および、他のアメリカ合衆国政府機関の科学者達は、彼らがスカラー電磁気学を理解するまでは、ウッドペッカー（きつつきノイズ）のような電磁送信器の生物戦（BW）能力を完全に理解することはないであろう。また、それらのシグナルに含まれている特定の生物学的情報を計測するための新たな装置を開発することもないであろう。この著者によって前に指摘されたように、一般的（古典である）電磁気学は、マクスウェルの真の四次元電磁気理論の相当の部分が切り取られたバージョンとしてヘビサイドとギブスによって作られた。

一般的電磁気（および、その具体性を与えられたエネルギー）は、私たちが言及している能力を示すことができない。また、特殊なスカラー電磁送信器は「生物の死亡と病気を齎す光線」を可能とするが、一般的電磁気はそのような結果を作り出すことはない。その代わりに、ヘビサイドとギブスによって切り捨てられた、マクスウェルの四次元電磁気理論に含まれるスカラーの部分を回復し用いなければならない。

マクスウェルの元々の理論は、四次元のスカラー構成要素の中のベクトル電場、および、磁場を包含した関数によって捕えられる電磁重力的特徴を有する、電磁気及び重力（G）を統合した学説だった。従って、マクスウェルの四次元理論は、例えば、スカラー波を（捕捉された）純粋なポテンシャル電磁気エネルギーとして規定している。そこでは、このポテンシャルエネルギーは、隠されてはいるが決定論的に組み立てられた内部双方向性電磁波パターンを含んでいる。ただし、決して外部の電場と磁場の合力は全部のベクトル加算に現れてはいない。四次元のスカラー構成要素のシンプルなテストによって、この事はたやすく発見できる。隠された決定論的電磁気基本構造としての特徴を持つこの純粋なスカラーポテンシャル（波）は、ヘビサイドとギブスによって完全に切り捨てられた。それは、たと

えそれが実験的に実証することができ、テストすることができるとしても、古典のベクトル電磁気理論には、現在まで省かれたままである。……

ポテンシャルが重力であることは知られているのであるから（ポテンシャルは捕えられたエネルギーから構成されていて、そして、重力エネルギーである）、スカラー電磁気は電磁気学及び重力の統合された学説なのである。それらの統合されたスカラー場は、隠された内部構造と共に、より多くの制限を持つ古典電磁気力場よりも、多くの能力と用途を持っている。

この四十年間に、ソ連はこのスカラー電磁気・重力理論と技術を秘密裡に開発した。彼らは、エネルギー論と呼んでいるが、そしてソ連は、巨大なパワーと驚異的な能力を持った秘密の統一場理論（ＵＦＴ）スーパーウエポンを開発し、配備するために、その理論を使用した。

―『Grabitobiology（1991）』（トーマス・Ｅ・ベアデン）

（六）

〝このままでは、自然界のバランスをも壊しかねないプラズマ波とＳ波の脅威は、必ず地球上の重力バランスをも壊し、この銀河系に異変を齎す可能性も否定し得ません。……その弊害が地球の太陽系惑星としての自然な運行の妨

一般に知られているマックスウエルの電磁方程式では、電界と磁界が、空間を波動として伝搬可能であり、その波動を電磁波と定義している。この電磁波はその方程式で、距離の二乗に反比例して、減衰するとされ、周波数によるが、伝搬については空間中の障害物、気象条件などさまざまな制約をうけるとされている。この方程式から、二名の学者がスカラー・ポテンシャルの部分を削除したとベアデンは解説している。ソ連は早くから、そのあたりに注目し、開発を行なっていたが、米国はそれに遅れをとったわけである。

千乃先生に対する攻撃が、一朝一夕には解決しない理由を、多くの読者の皆様は、ベアデンの主張から読み取られたと思う。しかし、一方でこの古典方程式の問題は検討されており、希望的観測かも知れないが、そう遠くない将来において、スカラー波に対して画期的な対応が可能になるかも知れないことを付け加えておきたい。

（九六年四月）

げになるかもしれないのです。〃

これは、エル・ランティ様が本誌九五年一二月号で述べておられた内容である。今回は、前回に引き続き、ベアデンの『Gravitobiology』より、この御示唆に関連した内容を紹介しよう。

内部電磁汚染のいまだ気付かれぬ致死性性質

自然の〃外面化されたエネルギー・バランス〃に加えて、従来気付かれていなかった自然の〃内部エネルギー・バランス〃が存在する。この内部エネルギー・バランスは、どのように惑星が汚染されていくのかを考える時に非常に重要になる。この惑星の最も致死的な汚染とは、この惑星や全ての生命システムの生物学的ポテンシャルに存在する内部の〃生命の川〃が、徐々に、間断なく汚染されていることにある。つまり、私たちは、まさしく生命を維持している外部コミュニケーション及び内部コミュニケーションの〃場〃と言えるものを徐々に汚染しているのである。簡単に言えば、私たちは、生命圏内及び生命圏上の生命機構を徐々に殺しているのである。私たちは徐々に死に向かって病んでいるのであり、誰もそのことを知りもしない。

私たちの科学が内部電磁エネルギーやその環境との関係、自然や私たちの生命圏に於ける総合的内部エネルギー・バランスについて十分な知識を発展させない限り、環境問題や生態学的問題について十分に討議し、完全に克服することはできない。

電気スモッグ（現在私たちの環境を満たしている巨大かつ増大し続ける多量のシグナルによる）の重要性は強調して強調し過ぎることがない。その未来に対する衝撃も同様である。このスモッグは、地球上に人工的量子ポテンシャルを徐々に作り出している。それは、致死的な〃ジャミング・ノイズ〃構造を有し、私たちの遺産である自然の量子ポテンシャルや生命量子ポテンシャルを徐々に汚染している。この汚染は、太陽、地球、月の連結した三重構造の内部汚染をも含んでいる。私たちは、太陽系全域の生命機構を、徐々に毒しているのである。地球のポテンシャルをチャージ・アップするに従って、隠されたコミュニケーション可能な双方向性電磁 Whittaker 構造を通して、そのチャージは太陽や月へと拡散していく。私たちは徐々に私たち自信を消滅しているだけでなく、この三重構造をも消滅させているのである。

生物学的システムの中での、生命エネルギー流動に対す

るジャミングの増加による影響は変則的なもの、しばしば、私たちには随時ジャミングとの関係は認識できない程ゆっくりとしたものによって明示されるであろう。このスモッグによる長期的かつ有害な影響は、現在既に起こっている。例えば、私たちの免疫システムに対して、非常にゆっくりとした妨害を行ない、そしてそれは関節炎や免疫抑制に伴った感染症などを引き起こす。また、インフルエンザのような病気も徐々にきつくなっていくようである。

この中で、人工的量子ポテンシャルなるものが登場するが、これがスカラーエネルギーを指している。この説明では、われわれの社会が抱える電気文明の部分に警告を与えている。これは、意図的にスカラー波を発生しているわけではないが、この状況に意図的なもの—兵器としてのスカラー波が、加算されるわけである。しかしこれは、徐々に進行しており、タイトルにもあるように、いまだ気付かれぬ……となるわけだ。

オゾン層破壊の問題のときもそうであったが、かなり前にある学者が警告していたにもかかわらず、破壊の原因となるフロンガスの撤廃が実行に移されたのは、最近である。現在、オゾン層には一部穴があいており、温室効果の危険性が叫ばれつつある。このように人類は失敗して、初めて学んでゆく。この姿勢は歴史の中で、改善されておらずスカラー汚染の問題にしても、今後の対応が取り返しのつかないことになるであろうことは、火を見るより明らかである。しかし、この瀬戸際で御身体を犠牲にされ、啓蒙を続けられているのが、千乃先生であり、我々にはこの偉大な船頭に従うほか残された道はないのである。そして、地球の存続をかけて戦っておられることを、あらためて心に命じなければならない。

（九六年五月）

（七）

この電磁兵器最先端シリーズも、はや七回目を迎えることとなった。ふりかえれば、プラズマ兵器の紹介から始まり、その狭義な意味においてのスカラー兵器との関連、そして、その理論提唱者の著作紹介へと至ってきた。

スカラー理論提唱者ベアデンによれば、現代物理学とスカラー理論の間に、大きな溝を生じさせているのが、マックスウェルの電磁方程式の解釈ミスなのである。今回はその根本問題について、触れたいと思う。

問題は私達の頑固なものの考え方にある

電気物理学、電気エンジニアリングの分野において、西側では、数十万もの博士課程修了者がいるにも拘わらず誰一人として、彼らが〃マックスウエルの方程式〃として教わったものがマックスウエルの方程式では全くないということを知らないということは、全く信じられないことである。ジェームズ・クラーク・マックスウエルによる本、論文にヘビサイドとギブスは一度として登場したことがない。それをほとんど誰もチェックしたことがない。誰もマックスウエルの四次元理論に戻ってヘビサイドとギブスが正しいベクトルの解釈をしていたかどうかを見ようともしない。Henry Monteith 博士と数人の著名な科学者を除いて、マックスウエルの四次元理論の原文は既に、皆の捜し求めているはずの、重力と電磁気力のマジックのような統一理論となっていることに西側の誰も気が付かないようである。それは既に工作可能なフォーマットになっている。それは実験用の台の上で工作可能であり、うまく働く。

――『Grabitobiology（1991）』（トーマス・E・ベアデン）

このなかで、「重力と電磁気力のマジックのような統一理論」とあるが、まさにこれが未だ現代物理学の越えられないハードルとなっている。ところが、最近Yさんより送られてきた資料に、大変興味深いものがあった。それは、このハードルが越えられつつあるというようにも感じられる画期的内容だった。

「世界を変えるフリー・エネルギー」（『ムー』学研　一九九五年九月号）より

オリアリーは、この0点エネルギーを電磁気的エネルギーの一種であると考えている。

「宇宙にあるエネルギーはすべて一種の電磁気的エネルギーだということができます。たとえば、これまでの物理学では、電磁力と重力は別のものだと考えられてきました。けれど最近では、重力もまた電磁力のひとつの働きにほかならないという論理が、正統的な物理学界の中でも認められるようになってきています。九四年にハロルド・プトフ博士が権威ある学会誌『フィジカル・レビュー』に載せた論文の中にその内容があります。

つまり、ハチソン効果の反重力現象は、0点エネルギーという強力な電磁力を使って引き起こされたという論理が成り立つのです。」

……宇宙にあるエネルギーはすべて一種の電磁気的エネルギーだと……これを見て、研究熱心なる読者の方は、気付かれたと思う。どこかで見たような……そう！ それは、何と十四年前の『JI』誌—千乃先生の「読者への連絡」の中にあった。

日立製作所が、ワインバーグ博士とサラム博士の理論（「弱い力」と「電磁気力」を統一したもの）の前提となる「電子は磁場とは無関係に動かしうる」との理論を検証したことに関して、物理学はこれからこの「弱い力」と「電磁気力」の統一に加えて、「強い力（核力）」と「重力」を加えて総ての力を統一した理論を作ろうとしている所です。うまく行けば重力の制御が可能になると期待しているという内容でした。

一言言わせて頂くなら、そしてここにある文をそのまま素直に解釈するならば、その全種の力の統一理論はすでにミカエル様が一昨年から主張なさっていたことで、宇宙にはいわゆる電磁気力の強弱しか存在しないというものです。

学者が名附けた雑多な名称の電磁波があっても、星の爆発や核融合から産み出されるプラズマの粒子は宇宙の何処から飛んできても同種のもの、星から四方八方に放射する電磁エネルギーが、星の自転・公転によって重力（引力）となり、磁力線であるがゆえに地表の諸々の物体を引き留め、且つ他の星や惑星・衛星をも牽引する力となっているし、又、一つの恒星系内の重力の集合エネルギーが他の恒星系に影響を及ぼし、牽引力となって働いている。

又、量子力学理論による法則はニュートン力学ではないとするのは誤りで、実は原子、分子内の安定は陽子・中性子の核が核力即ち電磁気力の引力によって原子内の電子を引き留め、地表の大気圏内を物体が自由に運動するように核力と核内部の陽子同士の斥力とのバランスの取れた領域を自由に電子が動く——というもので、ニュートン力学の法則を外れる物では決してないのです。何故ならばミクロもマクロも同一の法則の下になければ、自在に形や強度を変化させれば、必ず何処かにバランスの不統一、不均衡が起こり、例えば生命体や物体の（限

界はあっても）形の変化がスムーズに行われず、すぐ小爆発、破壊が生ずるはずです。恒星、恒星系に関しても然り、統一された力もしくはエネルギーの法則の下にあるから、容易に物体の崩壊が起こらないのです。原子の中の電子も分子内部の電子もすべて回転運動をしている、大気圏内の粒子も回転運動をしているから、安定しているのであり、且つ検知出来ないほどの微少磁場として互いの微量な回転する電気エネルギーが引き合ったり、反発したり、実は周囲の流動的に混み合うより大きな電磁場に引きつけられて、大気圏内を自由運動しているかの如くに見えるに過ぎない（原子・分子内も同じ）というものです（電気的に中性であるものは、大気の流れの中のほこりのように、風の中の木の葉のように、周囲のエネルギーの流れに動かされている）。従って「電子を動かすのに、磁場が無関係ではあり得ない」という他の学者の理論を正当とするものなのです。

ミカエル様によれば、宇宙に自然に存在する粒子には次の運動しかない。即ち、星の爆発による推進力と星の運動（重力）に影響を受けるもの、及び電磁場に引っぱられたり、はね飛ばされたりの運動、であるそうです。即ちアイザック・ニュートンの偉大な発見を否定するものは全宇宙には存在しないということです。

（『JI』一九八二年九月号）

（八）

このシリーズは、当初わかりやすく、電磁兵器の最新情報を提供することを目的に、スタートしたが、私に情報を提供してくださる方々のおかげもあって、スカラー波の核心的部分にもふれることができた。同時に、多くの方から

ミカエル様のコメントから、十数年の時を経て、地球の科学もようやく重力制御への門を叩いたというところだろうか。千乃先生への左翼勢力によるスカラー波攻撃……この問題の解決が、二十一世紀の人類のあり方をあらゆる意味で方向つけることは、間違いなさそうだ。

（九六年六月）

質問をいただき、その中にはもっと基本的なことを知りたいというご要望もあったので、スカラー波の基本性質について、電磁波との比較を通して、ふれたいと思う。

読者の皆様は、スカラー波は縦波という記述を、よく関連書籍で目にされていると思う。電磁波は横波である。なぜスカラー波が、縦波なのかという問題にはいる前に、そもそも電磁波とは何なのか、縦波と横波の違いは何なのか、今回はそれを簡単に説明したいと思う。

まず電磁波の定義を辞書でみてみよう。

でんじは【電磁波】

電磁場の周期的な変化が真空中や物質中を伝わる横波。マクスウェルの電磁理論により、光やX線が電磁波にほかならないことが示された。(広辞苑)

すなわち電磁波は振動する（周期的変化）電場と磁場によるもので、その周期的な変化は、次のようになる。

周波数 ν（ニュー）　周波数（振動数）を表す。一秒間におこる振動の回数、単位Hz（ヘルツ）

波長 λ（ラムダ）　波長を表す（ローマ字のlに相当、length)。真空中で一回の振動によって電磁波の進む距離。

光速度 c　真空中での光（電磁波）の速度を表す

先の波長と周波数の関係式は、この記号のもとで次のようになる。

$$c = \nu\lambda$$

電磁波の伝わる速度cは真空中で約 3.0×10^8 m/s（30万km／s）である。例えば、周波数30MHzの電波（電磁波のなかで送受信可能なものを電波という）の場合先の法則に従えば、

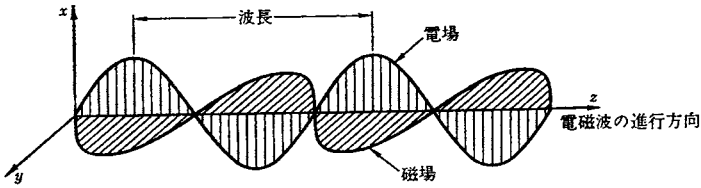
$$\lambda = c/\nu$$

$$c = 3.0\times10^8$$

$$\nu = 30M\ (3.0\times10^7)$$

よって　$\lambda = 10$ m

この電磁波は、横波であるが、この横波とは、媒質の振動方向と波の進行方向が垂直な進行波であ



り、電磁波の場合、電場と磁場が進行方向と直行している状態を意味する。

では、スカラー波の基本性質といわれる縦波はといえば、波の振動方向と進行方向が一致している。わかりやすくいえば、縦波とは、音波などのことである。音波では、空気が伝わる方向に振動している（粗と密の部分が発生している）。スカラー波を、テスラーは電気音波と呼んだといわれる。物理を専攻されていない方には、この縦波、横波のイメージが、まだ充分ではないと思うが、この電磁波における横波、縦波の問題は、専門に電磁気学を勉強していないと正確にはわからない。電界Eと電束密度D、磁界Hと磁束密度Bから構成される、現在知られているマックスウェルの基礎方程式からは、縦波の解は導き出せない。ベアデンの言うところの二名の科学者に削除されたポテンシャルの部分にその秘密が隠されているようである。

天上界は、『天国の扉』が発刊された時、多くの科学者が天の元に集うことを、期待された。千乃先生が左翼勢力の陰謀によって、大変な状況にある今、悪との科学力の差は、致命傷になる。天上界、千乃先生の元に集う私達は、いまだ知られていない法則を明らかにし、ユートピア建設の為、正しく科学を使うべく、最初から義務づけられていたことを思い起こしてほしい。

（九）

最近、読者から、本シリーズの感想が寄せられていることを編集部から知らされたが、それによると理科系の方々の興味は、「マックスウェルの電磁方程式から削除されたスカラー波部分」に集中しているようである。やはりここにきたかという感じだが、実は、今まで紹介したベアデンの『Gravitobiology』の和訳は、どこからも出版されておらず、おそらく日本の研究者でもその内容を取り上げている人はいない。それゆえ、理科系の識者は、新鮮かつ衝撃的なものを感じとったのだと思う。ただ『Gravitobiology』の中に、マックスウェルの元の方程式から、何がどの様に削除されたかは、詳細に記載されていないため、マックスウェルの元の方程式と、現在物理学で提示されているところのマッ

参考文献　理化学辞典（岩波書店）

クスウェルの方程式を比較検討してはどうかというKさんからの提案があり、現在学術資料を検討中である。

今回は前回に続いて、スカラー波の性質について紹介してゆこう。スカラー波の性質である縦波は、進行方向と振動方向が一致している波で、液体や気体といった流体内を伝わる、これが音波に代表されることは前回述べた。これは伸び縮みの波、すなわち荒い波とそうでない部分をもつ粗密波ともいう。これに対し電磁波の持つ横波の性質とは、進行方向と振動方向が垂直であり、これは、固体内を伝わる波にも見られる。固体内の波は、縦波と横波の両方が生じているが、これは、固体内には、流体と違い弾性があるため、隣接し合った部分で引き合う力と、横にずれあう力が発生する。このずれ弾性が横波を発生させている。電磁波でいえば、その進行方向に対して、電場と磁場が垂直に振動している状態をさすのである（注）。

スカラー波の縦波性質の学説の起源はやはり、ニコラ・テスラ（一八五六～一九四三）にあり、「真空中で、横波である電磁波は伝わらない。電気的音波（縦波のスカラー波）こそが真空を伝わる」と主張していた。これは、スカラー波が真空中の場のゆがみであることを示唆しており、真空に粗と密の部分が発生しているのである。音は空気のゆがみであり、スカラー波も音も縦波なのである。なぜスカラー波が縦波なのかという根本問題については、ベアデンの指摘するところの「マックスウェルの電磁方程式から削除されたスカラー部分」の調査を待っていただきたい（物理専攻の方は、現在知られているマックスウェルの電磁方程式からは縦波成分が、導き出せないことはご存知だと思う）。

あえてスカラー波のイメージがまだ掴みにくい方のためにわかりやすく申し上げるなら、「スカラー波とは、私達が物質と呼んでいる世界の根源的な力場のようなもので、現在の知られている地球の科学では、まだ完全に理解されていない。存在しているものすべてが電磁波の強弱であるならば、スカラー波はそれと表裏一体で存在する。スカラー波は重力波ともいわれ、そのことは、電磁力と重力の統一を示唆している。このスカラー波が人工的に発生させられ、例えば兵器として応用された場合、その出力いかんで効果も変化するが、生態系に与える影響は絶大であり、細胞の不活性化や遺伝子への影響も憂慮される。」

実際のところベアデンの著書には、頻繁に数式が登場し、スカラー波理論を完全に理解することは、大変難しい。それで、比較的イメージの掴みやすいスカラー波の縦波的性質を簡単に紹介した。　このシリーズを読みスカラー波につ

いてもっと知ろうという気になっていただけたのなら幸いである。

このスカラー波の完全解明が、まだまだ今後の科学の発展に拠るところが大きいということ、それがゆえに千乃先生を通じて出される天のメッセージには、地球の科学を凌駕した、重要な示唆が織り込まれていることを見落としてはならない。

（注）　光の波動説に理論的基礎を与えたとされるFresnel(1788-1827)が一八二一年光の媒質としてのエーテル（当時空間を満たす媒体としてのエーテルが仮定されていた）が弾性体であるとし、光はそれを伝わる横波であると唱え、なおエーテルの圧縮に対する弾性がきわめて大きいために縦波は瞬時に伝わり平衡が成立するとしたが、それは後の電磁波理論で否定された。

（九六年八月）

（十）

私が調査した範囲で、スカラー波の身体効果、心理効果に触れている書物は大きく分けて二つの流れがあり、一つはベアデン、もう一つはマトリックスⅢである。後者のマトリックスⅢは、三年ほど前、米国で発刊されたものである。当時、日本スカラー波研究者の間で話題となっていたが、残念ながら邦訳が出版されるまでには至らなかった。このマトリックスⅢは、いろいろなトピックスが盛り込まれており、フィラデルフィア実験、モントークの椅子などさまざまである。この中から、今回は、マインド・コントロールについて見てゆこう。

第三章マインド・コントロールについての研究者との会話

（一九九一年十二月）

はじめに

以下は、マインド・コントロールに関係した各分野の研究者の方々数人との会話を収録し、抜粋したものです。これに類するものは過去出版されたことはありません。他のインタビュー同様今回のインタビューも、ご解答下さる研究者の方々のアイデンティティーを保護する為、公開質問形式でなされています。このレポートに関する補足情報は付録4のオリオン・テクノロジー・レポートに記載されています。

X：さて次は、精神活動に影響を与えるものについて、また、その中で読者の皆さんに特に知って頂きたい点についてお話して頂けませんか。

Y：私達は初期のフェニックス・プロジェクトについてお話をしてきました。彼等は一九六九年頃フェニックス・Ⅰ（ワン）に関する最終レポートを書き上げました。その中で彼等はこう述べています。「電磁気が人間に与える影響を学んだ今、私達は、電磁気を使用して人々の思考様式に影響を与えることが可能であると信ずるものである」。

下院の人達がこのレポートを読んだ時には、肝を潰し、「こんなことはしてほしくない！」等と発言していました。つまり、下院の人達は、誰かがこのテクノロジーを使って彼等をコントロールするのではないかと恐れているわけです。下院の人達は「こんなことはするな」と言っているわけですが、しかし、これを継続して欲しいと考えている人達は軍事関係筋に赴き「敵が武器を置き降伏するような、ちいさな楽しい兵器がつくれるようですねぇ。」等と言っているのです。軍がこの兵器を望まないなんて、いったい何人の人が思います？　そして、軍はモタックにある古びた基地をこの兵器開発に当て、フェニックス・Ⅱ、モントーク・プロジェクトを開始しました。このプロジェクトは三段階に分かれていて、その第一段階は「マイクロ・ウェーブ・オーブン」ステップとでも呼びたくなるようなもので、マルチ・ギガワット発信機の出力がその前に立つ人間にどのような影響を与えるのかを見ようというものでした。実験台になる人を座らせ、そこに焦点を当て、スイッチを入れる。勿論、その人は調理されてしまいます。何人の人がこのようにして殺されたか分かりませんが、多くの人が殺されたということは確かです。最終的には、「おい、俺たちが欲しいのは〝燃焼（殺人）光線〟じゃなく、非ヘルツ光線だよ。」と誰かが気付きました。彼等はアンテナを回し、リフレクターを通してゲイン・ホーンを標的となる人物に向けます。それで、彼等にも何かができるようになりました。発信機を変調し、精神状態を変えるようなＥＬＦ（注一）を使うことによって、離れた所から人の精神状態をコントロールすることが可能になりました。

これは大成功でした。合衆国政府から誰かが派遣され、人の精神（マインド）から直接その人の思考を引き出すことのできるセンサーを提供しようと申し出てきました。そして、彼等はセンサー装置を持ってきて椅子に取りつけました。これが有名なモントーク椅子です。次に彼等

のしたことは、センサーの出力をコンピューターに繋ぎ、そのコンピューターでセンサーの出力をデジタル・コードに翻訳することでした。このデジタル・コードは思考パターンを表すことになります。これらの装置は、思考パターンを保存するコンピューターへと接続され、また、アンテナから発せられる変調パルスを発生するコンピューターへと接続されました。つまり、彼等はマインド増幅器を作ったわけです。

（Matrix・Ⅲ）

これは、一九八三年まで行われていた合衆国政府が極秘に行っていたとされる、モントーク・プロジェクトについての内容である。傍点部に示されているように、非ヘルツ波が登場する。これは、原文ではnon-Hertz waveとして表記されており、まさにヘルツがない波すなわちスカラー波を示している。この方面の開発では、旧ソ連に遅れをとっていた米国も七〇～八〇年代には、やっと本格的研究を行っていたということたろうか。

次に、こういったマインド・コントロール装置の作用にいかに気付くかについての示唆があったのでそれも紹介しよう。

X：ある個人が、このような装置によってコントロールされているかどうかを知るにはどうしたらよろしいんでしょうか？

Y：何かが〃異常である〃といったような、感情的・肉体的に示唆するものがあるかも知れません。典型的な例としては、私達は皆〃何か変だ〃と感じる時があることを知っています。何か異常なことが起こっているかどうかを見極めるためには、通常どのような行為をしているのかということを知っていないといけません。あなたの精神に侵入しようという試みがなされているかどうかを認識するためには、高い知覚力が必要となります。現時点では、それがどのように働くのかを知ることがおそらく最高の防御でしょう。それを理解するということは、いわば、あなたの精神にある〃穴〃に〃栓をする〃ということです。マインド・コントロールをブロックするテクノロジー機器は、人間を取り巻く波動秩序を超越したものでなければならないでしょう。つまり、マインド・コントロールの効果を搬送するために使われる四次元空間における直交回転を超越するためには、統一場タイプの装置を使用しなければならないでしょう。もしあなた

がこれらのより高い秩序の中で活動することができるのであれば、このようなテクノロジー機器を使うことなく、あなたの周りで起こっていることをあなた自身が意識的にコントロールすることができます。また別の面では、もしあなたが意識的に〃時間の外で〃活動することができれば、この時間依存性を持つ四次元空間的な変調パルスがあなたに与える影響はほとんど、あるいは全くないでしょう。マインド・コントロールを行っている人達は、あなたにそのことを気付いて欲しくないのです。ですから、彼等は〃丸鋸〃シグナル（注二）を送信するわけです。つまり、それを認識するということが必ずマインド・コントロールに対抗する大きなステップとなるのです。

（Ｍａｔｒｉｘ・Ⅲ）

これをみると、マインド・コントロールの技術的防御を示唆している箇所もある。私達が理解できる範囲で、簡単にいえば、マインド・コントロールに晒されれば、いつの間にか自分の考えではない送信者が意図した考えが、頭の中に浮かんでくるようになり、「これが自分の考えではない」と、気がつくことこそが、防御になるということだろう。現在の千乃先生の周辺の人々に起こっている状況をあてはめてみると、周辺の人は、敵のスカラー波によるマインド・コントロールにより、千乃先生を誤解したり、悪意を持つような考えを常に植えつけられている。これに充分な注意を払い、心理状態を整理しなければ、敵の思うがままになってしまい、結果、千乃先生に対し不敬な言動をとってしまうのである。千乃先生に対し不敬なる考えが頭をよぎったならば、「これは私の考えではない」と断固拒絶し、心に残さないことが、大切ではないだろうか。

次回は、引き続きマトリックス・Ⅲから、マインド・コントロールが具体的にどう行われているか、その通信技術について紹介しようと思う。チェック・ポイントは、身体の共振周波数である。

（注一）超極低周波。数ヘルツの電磁波で、波長が長い。物質に対する透過性が高い。

（注二）旧ソ連の米国大使館に照射されていたとされるウッドペッカーノイズ（キツツキノイズ）と同様のもの。

（九六年九・十月）

（十一）

今回は、マトリックスⅢからマインドコントロールの通信技術の紹介と、英国の新聞からの興味深い記事を、皆様にお届けしようと思います。

マインドコントロールの通信技術

有効なマインドコントロールを開発するまで、かなりの試行錯誤があり、最初は、媒体として、ＥＬＦ（超極低周波）から始まり、人間の心身活動に影響を持つ最も有効な周波数を、利用するにいたったということです。これは、まさに旧ソ連のキツツキノイズと同様なもので、合衆国は、ソ連にかなり遅れて、開発にいたっております。開発時期から考えて、現在の千乃先生に対する攻撃は、ソ連からの技術供与がゲリラ側になされた可能性があると思います。

このマインドコントロールについての記述で興味深いのは、これらにあわせ、特定の人物をモニターする場合の方法です。

マトリックスⅢから引用しましょう。

「……このシグナルには三つのモードがあると考えられています。第一のモードは、探査モードです。不特定多数に送信されたシグナルを感受性の高い人達がそのシグナルをキャッチし、何かを送り返します。このようにして、そのターゲットとなる人達を特定し、その人がどこにいるのか知るわけです。第二モードは、精神の活動を中断する機能をもつシグナルを送ります。……第三のモードは個人をターゲットにしたとき使われるものです。まず、目標である個人が身に付けている衣服の合成素材に共振を起こし、そこに焦点をロックします。そして、それを使ってその人物をターゲットとするわけです。」

おそらく、探査モードの段階でも、その到達能力から考えて、非ヘルツ波（スカラー波）はシグナルになんらかの形で変調されのせられているか、シグナルそのものが透過性の高いスカラー波の性質をもっているのかも知れません。残念なことにマトリックスⅢでは、こうした対生物兵器の技術に関して、電磁波とスカラー波の境界が、明記されておりません。いずれにしても、スカラー波に関する技術の核心部分が、私たちの目にふれるのはまだまだ先のことだ

といえるでしょう。

BREAK THROUGH AS SCIENTISTS BEAT GRAVITY　（科学者の大発見が重力を打ち負かした）

by Robert Matthews and Ian Sample

世界初の反重力装置の全容がフィンランドの科学者達によって明らかにされようとしている。装置の幅は約30cm。物体が何であれ、その装置の鉛直上にある物体の重量を減少させるという装置である、と言う。

技術革命の発火点ともなり得るこの主張に関して、科学者達は綿密な調査を行なった。そして来月、科学雑誌に掲載されることとなった。重力はこの宇宙に最も広く存在する〝力〟であり、それに抗することが出来るということは、交通から発電に至るまでの総てが変容してしまうことを意味する。

サンデー・テレグラフの得た情報によると、NASA（アメリカ宇宙局）は、この主張を真剣に受け止め、反重力効果がどのように飛行手段を変革できるかについての研究に資金援助を行なうようである。

この装置の効果を発見したフィンランドのタンペレ技術大学の研究者は、この装置によって液体を発電タービンに送りこむ方式を使えば、新しい電力源の中心的存在となり得ると言う。

他の使用方法はまだ想像の域を出ないが、ビルのエレベーターはこの装置に取って代わられるかも知れない。上に行きたい人は、反重力装置を作動させるだけでよい――その人の重量が消え――小さな力で押してあげればその人の行きたい階へと上がって行く。

地球の引力に抗する為、ロケット技術は常に費用と危険を伴ってきた。それに比べると宇宙旅行も日常的なものとなるであろう。この装置を使って液体を重力に反して持ち上げ、そして既存の重力を使って地上にある発電タービンへと落下させる。この装置は発電技術に革命をもたらすかも知れない。

この調査を行なったユージン・ポドクレトノフ博士によると、発見は偶然に起こった。それは博士の研究対象であった〝超電導〟の研究の最中のことであった。超電導とは、ある物質が持っている非常に低い温度において電気抵抗を失う能力のことを言う。クライオスタットと呼ばれる低温の容器の中で、三つの電気コイルが磁場を発生する。その磁場の中に浮かび、高速で回転する超電導セラミック・ディスクに関する実験を調査チームは行なっていた。

ポドクレトノフ博士の言。「友人がパイプを吹かしながら実験室に入って来ました。すると、彼の吹かすたばこの煙がクライオスタットの上に来ると常に天井へと上って行くのが見えるのです。――何故そうなるのか私達には説明が着きませんでした」。この装置の鉛直上にある物体には、小さな重量の減少が見られるという実験結果が得られた――まるでこの装置が、物体を重力の影響からシールドでもしているかのようである。ほとんどの科学者にとっては、このような効果はあり得ないことだ。「私達は、これは何かの間違いではないかと考えました」と、ポドクレトノフ博士。「しかし、（実験には）細心の注意を払いました」。それでもこの不可思議な現象は見られ続けた。調査チームは、この装置の鉛直上の大気圧すら小さな減少が見られることを発見した。この装置の鉛直上では、研究所の全ての階でその効果が見られた。最近多くの〝反重力〟装置と言われるものがアマチュア、専門家の双方から提唱されているが、その全ては学会から拒絶されている。この最新の反重力装置のどこがそれらと異なるかと言えば、それは、それに対し懐疑的な独立専門機関による綿密な調査を通り抜けてきたことにあり、また、英国物理協会の出版しているJournal of Physics-D:Applied Physicsに掲載されることとなったことにある。

そうとは言え、他の研究チームが追実験を行なうまでは、ほとんどの科学者にとって〝反重力〟というアイデアはあまり気分の良いものではないであろう。この反重力効果とは、長らく探し続けられてきたアインシュタインの一般相対性理論の二次的効果と言われているものではないかと考えている科学者もいる。それは、この二次的効果によって回転する物体が重力に歪みを発生するというものである。今まで、このような効果は研究室で計測するには余りにも小さく、計測できないのかも知れないと考えられてきた。しかし、アラバマ大学の研究員であるニン・リー博士は、超電導体内の原子がその効果を大きく拡大しているのかも知れないと述べている。彼女の研究にはアラバマ州ハンツビルにあるＮＡＳＡのマーシャル・スペース・フライト・センターが援助している。また、そのアドヴァンス・コンセプツ・オフィスのウィット・ブラントリー氏は「現在調査中です、調査しないことには何も分かりませんから」と言っている。フィンランドのチームは既にプログラムを拡張し、反重力効果を増幅できるかどうかを研究中だ。最新の実験では、この装置が鉛直上にある物質の重量を二％減少させ、もう一つこの装置を鉛直上に置くとその倍の減少

が計測されることが分かった。
〔一九九六年九月一日号『サンデー・テレグラフ』（英国）、P3より〕

追跡調査談話

その後、Journal of Physics-Dには、フィンランドの科学者による論文は掲載されなかった。

九月九日ユージン・ポドクレトノフ博士から来月（十月）出版されるJournal of Physics-Dから彼の論文を削除するよう申し出があった。彼の申し出は受諾され、出版元のＩＯＰは、この件に関してこれ以上の措置はとらないこととなった。
（サンデー・テレグラフ科学関係担当Robert Matthewsのレポートより）

「高速で回転する超電導セラミック・ディスク」から偶然発見されたとは驚くばかりですが、こうして、一般の目に触れる形で公表されたのも意外でした。というのは、こうした研究は常になにものかの妨害にあい、闇に葬られることが多いのです。ですから今回の発表には、なんらかの含みが隠されているのかもしれません。事実、Journal of Physics-Dへの論文掲載は実現していません。

ただ、今回の発表は、スカラー兵器と戦っている私たちに、重要な手がかりを示唆しています。

というのは、重力波とも呼ばれるスカラー波は、重力の変化に従い性質が変化してしまいます。攻撃の意味をなさなくなる可能性が大きいということです。残念なことに、このフィンランドの科学者による研究は、超電導を使用しておりこれには、液体窒素や、液体ヘリウムの冷却前提となっているため、どこでも再現できるといった実験ではないのです。

しかしながら、二年前、姿を隠されていたエル・ランティ様が千乃先生の元に出現され、スカラー波解明をふくんだ、科学のパラダイム（注）の移行を示唆されていたことを思い起こせば、今回の動向は、偶然の一致とは、思えません。私たちの目にみえるところで、世界が変わりつつある……まさに二〇世紀末のシナリオが進行している……そのあとにみえてくるのが、善なる世界なのか悪なる世界なのか……その鍵をにぎっているのが千乃先生であり、私たちはこの方を死守せねばならないのです。

（注）科学者が共通に理解している考え、学問母体のこと。

（九六年十一月）

りするために通常の計測機器を利用しなければならない。検出器の一つの形は、Faraday-shielded chamber内で、標準ポテンシャル（既知の内部二波構造を有する）を使用することであるが、その結果、試験対象である勾配のないポテンシャル（それはそのようなケージ保持器を突き抜けるが）はケージ内の標準ポテンシャルと干渉し、ケージ内部に勾配を生じさせる。干渉ゾーンの中で検出針は勾配を電子転換として検出する。最終結果として、被験ポテンシャルの内部W／Z構造の測定（値）が得られる。他のタイプの検出器も可能である。これは単に分かり易い一つの例である。

思考、精神、記憶及び細胞の制御は、測定可能である

（部分訳）

我々が述べているのは以下の事である。すなわち、適切な計測機器を開発することによって、個人特有の量子ポテンシャルの深部内部構造を含む、思考、記憶及び生体を機能させている深部コントロールシステムを直接検出する事が可能である。我々は単なる推論としていうのでなく、一つの実験科学がまさに出現しようとしていると話しているのである。

重要な点は、量子ポテンシャルがW／Z内部構造をも持つということである。そしてその構造は、意図的に生成したり、外部的手段によって操作したりする事が可能である。離れた場所からの操作は、可能性があるだけでなく、工学技術的にも可能なのである。生体系と量子ポテンシャル生体が、意志や、深部コントロール、精神と思考のプロセスの作動のために、量子ポテンシャル――生体内部の全ての原子核に連結している特定のスカラーポテンシャル――を利用することが判明した。これは生体系の簡易な定義だとも言える。

生体は、身体を構成する全ての原子（核）を連結しているスカラーポテンシャルの内部W／Zを、生体の最深コントロールシステムとして使用している。これを持たないあるいは行っていない、いかなるシステムも、生きているシステムではない。これはまた精神的な意志がどのように身体的な反応を呼び起こすことができるのかという古来の哲学的な問いをも説明するが、それは私の発表の範囲を超える。それはまた、なぜウィルスが溶液から結晶として凝結

する事ができ、かつその結晶が何十年も保存できるかを説明する。そして、その結晶が再溶解されるとき、このウィルスが分離し、彼らの〃生きている〃状態を再開するのかを説明する。ウィルスを構成する要素成分及びその量子ポテンシャルが完全無傷であり続け、またその要素成分の原子核における量子ポテンシャルの中で保存されたW／Z構造が同じ状態であり続ける限り、ウィルスは仮死状態にある。

さらに、種それ自体も、遥かに弱いが、（トポロジー的により深いレベルにおいて）そのメンバー全て（彼らの身体中の原子核全て）を連結している量子ポテンシャルを有しているということも判明した。これは、Sheldrakeの形態形成場――その場はまさに一つの種の量子ポテンシャルである――に相当する。たとえば、ユングの集合的無意識は、このモデルの中で科学的かつ試験可能性をもって表現することができる――が、しかし再び、それはこの発表の範囲を超えてしまう。

（出典　「電磁波及び放射線の生物学的影響と癌及び解決の健康問題」　T・E・ベアデン）　（翻訳・H様）

現在、数名の専門家によって、JI誌面上で展開しているスカラー理論によるパラダイムシフトへの示唆――現代物理学への挑戦、この試みの現実化は、残された時間すくなき今私たちに求められています。千乃先生の真価に気づくこと……それは母なる地球の壊滅を迎えてからでは遅いのです。

（九七年九月）

身近に迫った スカラー波、電磁波による環境破壊

小賀竹留

一、身近になったマインド・コントロールの恐怖

マインド・コントロールなんか現実的な話ではなく、空想科学や夢物語と考えている人が一般には多いのではないでしょうか。書店に行けば、脳科学関連の図書がずらりと並んでいて、脳の詳細な基礎知識が記述されています。ところが、この脳科学を利用したマインド・コントロールの話になるとほとんど説明がないのが現状であり、まるでマインド・コントロールという事実を一般に知らせたくないかのようにさえ思えてきます。これも一種のマインド・コントロールなのでしょうね。

マインド・コントロールには、催眠術、脳の内部に発信機や受信機を埋め込むインプラント、電磁波による脳波の直接的な操作などがあり、今回はインプラントの技術的な基礎と電磁波による脳波の直接的な操作について概要を説明します。

いろいろな本を読んでやっと気づいたのですが、マインド・コントロールはその気になれば、書店で発売されている脳科学の基礎知識と無線工学の基礎知識があれば簡単にできるものなのです。これから説明する概要だけでも、技

術的にはすでに実現されているものばかりですが、他にもマイクロ波と光の点滅を利用した拷問装置なども実用化されてます。

一般の人にも入手できるマインド・コントロールの情報でさえこんなに恐ろしいのですから、これを専門に行なっている機関では、これ以上にもっと進んだ研究（スカラー波を応用した研究）が行なわれていることは、メッセージなどから周知の事実です。

一　インプラントの技術的な基礎

（一）脳の電気刺激とマインド・コントロール

ご存じだと思いますが、人間の頭蓋骨に穴を開け、脳の中に小さな電極を数十か所埋め込み、脳の各部分に電気刺激を与えて、どのような感情が起こり、行動をするのかという研究が、何十年も前から研究され続けられています。

初期の研究では、被験者の脳に電気的刺激を与えると、腕が動いたり、感情が動かされたりしますが、被験者自身がこれは自分の意志とは無関係なものだと分かっていました。

ところが、脳の深部に電極を埋め込み様々な実験をしていくうちに、電気刺激により発生させた感情なのに、それに気づかない、つまり注意しないと、自発的な意志によるものだと錯覚してしまうようなことが可能だというのが分かってきました。さらに、一部の記憶を消したりすることも可能だし、催眠術を使えば思い出させることも可能なのです。これこそ、マインド・コントロールが可能だという証拠であり、実用化が可能なのだということです。

（二）マインド・コントロールの実験設備

当初、脳に埋め込まれた電極は長い電線を通じて電池とつながっていたため、動くにも非常に不自由なものでした。次に現れたのが、電極を脳に埋め込み、電池を頭部の外に取り付けるものでした。ところが、電極と電池をつなぐため電線が脳の外部から内部まで貫通しているため、生物学的な問題が発生しました。そして、脳の内部に電極と電池と充電器を埋め込む方法が考え出されました。脳の内部の電池を充電するのは、ありふれた家電製品にも使われているアダプターや変圧器などの非常に簡単な原理で、電磁誘導の原理（二個のループ上のコイルが、お互いに向き合った状態の時に、片方のループに電流を流すとこのループに磁界が発生し、この発生した磁界がもう一つのループに電圧を発生させます。）により、脳の内部の電池を充電させる

ことができるのです。

さらに、脳の内部に電極と電池とアンテナを埋め込み、電池を充電するのに外部からのマイクロ波を利用することさえ現代技術では簡単なことです。しかも、埋め込んだ電極のＯＮ／ＯＦＦさえも、テレビのリモコンの操作と同じように簡単にできるのです。

（三）インプラント

技術の進歩とともに、脳内部の電極やアンテナや電池は非常に小さくできるようになり、２・５ｇ以下にもできるとのことです。

インプラントは宇宙人の仕業だと宣伝されていますが、本当はディスインフォメーションなのだと思います。インプラントされた人によると、必ず、病院でインプラントされているのが何よりの証拠です。そうだとすれば、宇宙人は被害者なのかもしれないし、自分はインプラントされたと思い込み威張っている人や選民意識を持っている人はただの操り人形であり、かわいそうとしかいいようがありません。

しかも、悪意がある場合、一日中寝かせてもらえず、疲れ果てて、免疫が弱くなり、病気がち、しかも周囲に精神異常だと思い込ませることもできるということにもなります。

二　電磁波による脳波の直接的な操作

これまでは、脳の内部にアンテナを埋め込み、このアンテナに情報を送信することで、マインド・コントロールは可能でした。ところが現在、マインド・コントロール用の情報を送信できるアンテナはＰＨＳに代表されるようにどこにでもあります。このため、一度インプラントされた人は、インプラントを取り出す以外、助かる方法はないのです。また、この方法では不特定多数の人々へのマインドコントロールを行なうことはできませんでしたが、以下に簡単に説明するマイクロ波の特殊な性質と全世界に張り巡らされつつあるＰＨＳや衛星や電信電話機の普及により、不特定多数へのマインド・コントロールが可能になりつつあります。

マイクロ波を頭部照射すると、高い領域の音を聞き分けることのできる人に多いのですが、クリック音をきくことができる人がいます。このことを利用して、一音節の簡単な音の振動を録音しパルス波にして頭部に当てたところ、頭の中にその音節が聞き取れたとのことです。

さらに研究は進んで、人の様々な感情状態の脳波をアナログで記録し、その記録した内容をマイクロ波に載せて、他の人に照射すると、照射された人に同じような脳波パターンが発生し、同調してしまいます。余談ですが、気功師とその患者の脳波も同調するとのことです。

このことを利用して、マイクロ波による人間の心への影響は、伝えたい内容のアナログ情報を脳波の周波数でパルス上に伝送することにより効果的に影響されてしまいます。面白いことに、パルスの強さが強ければ強いほど影響力が大きいかというとそうではなく、弱過ぎてもだめだし、程よい強さのところがあります。この強さが低レベルのため、恐ろしいことに法律的には問題視されていません。

二、低周波磁気に被曝している現実

九七年一月号のメッセージからスカラー波攻撃の基本的な原理とその恐ろしい被曝の現実を、エル・ランティ様が分かり易く説明しておられます。

要約すると、電磁気的な性質を利用して搬送されるスカラー波を利用した攻撃は、余りにも多量のため、電子を不活性化する性質と、生体エネルギーが常に循環しているところに集まり、磁気圧を増加させる性質（万有引力的な性質）により、細胞の不活性化／免疫機構の劣化／生物にとって致命的な酸素欠乏等を招き、現在自然破壊が進行しているというものです。

三　結論

ここまで、マインド・コントロールは夢物語ではなく、技術的には書店に並んでいる脳科学の本と家電製品レベルの技術で可能なのが、理解できるかと思います。

現在我々は、電磁波によるマインド・コントロールだけではなく、スカラー波によるマインド・コントロール及び様々な非人道的な攻撃を左翼ゲリラから受けています。

（参考文献）『マインド・コントロールの拡張』第三書館

以下ここで紹介する一般書の低周波磁気による被曝症状は、送電線から放射される電磁波を含む0ヘルツ～一〇〇〇ヘルツの電磁波のみによる実験結果なので、電磁波を搬送波としたスカラー波攻撃に比べ人体への影響力は、非常に小さいとは思いますが、確かに非常に似た症状が臨床的に現れているため、エル・ランティ様のメッセージの補足になればと思い、投稿いたしました。

現在一般的には、電磁波の生体への影響は熱的なものだけという観点で調査されているために、マイクロ波以上の高エネルギーのものしか危険でないと考えられています。そこで、特に超低周波の電磁波に関しては、熱的な作用がないため全く安全だというのが定説になっています。ところが調べてみると、いろいろな所で、熱的な作用をしない電磁波による被曝が、種々の病気の原因だということが報告されていました。

特に、千乃先生の「雑ノート」にあるような攻撃に伴う一〇〇ヘルツの電磁波の存在が、非常に重要なこと（このスカラー波攻撃の本質的な部分を見抜いておられるように思います）や、本当に小さな磁気の変動が生体機能をおかしくすることについての情報についてもお知らせします。

〔補足〕以下の実験では、磁気を発生させる方法としては、スカラー波を利用したものではなくて、電磁石／磁石もしくは、低周波の電磁波／マイクロ波を利用しています。

一、生体内の生体物質は磁気を感じている

磁石などを手に持ったりしても、敏感な人以外は、磁気を感じることはないのではないでしょうか。しかし、強い磁気が生体にかかると、感覚としては何も感じていないようですが、生体内の物質は磁気を感じているということが確かめられています。

生体内の化学物質に磁気をかけたところ、金属を含まない蛋白質、ＤＮＡ、ベンゼン環などが磁気をよく感じ、他にも、金属を含んでいる赤血球や葉緑体なども磁気に敏感だということが実験で確かめられています。

特に、視神経の受光細胞については詳しく実験されており、磁気をかけると、ヒマワリが太陽を追いかけるように、受光細胞が磁気の方向と平行に向いてしまいます（蛇足ですが、霊視はこの性質を利用しているのではないかと思われます）。同じように磁気の方向に向いてしまうものとしては、蛋白質、ＤＮＡ、ベンゼン環等です。しかも、蛋白質やＤＮＡはコイルのような構造をしているので、磁気がかかると伸び縮みをします。一方、細胞膜を形成している脂

質は、磁気の方向に向きを変えてしまいます。

鉄は磁石に非常に敏感なため、赤血球のような金属を含むものは、磁気がないときには球形だったものが、磁気をかけると楕円形に変形したりします。

以上のように、生体内の物質は磁気を感じており、磁気の方向に平行もしくは垂直の方向に向きを変えてしまい、形までも変えてしまうものがあるということです。このように、磁気に敏感になった理由を次で説明します。

二、低周波磁気に生体が敏感な理由

生物が生まれる以前の太古から、地球には太陽から様々な周波数の電磁波、電子、陽子などの素粒子が降り注いでいて、地球の電離層は太陽からの有害電磁波などを排除することで、生命が誕生しました。太陽の活動に強／弱が発生すると、それに伴い地球の電離層はゆらゆらと振動し、0ヘルツ～一〇〇〇ヘルツまでの超低周波の電磁波を常に発生します。そして、特に一〇〇ヘルツ当たりの周波数が生体に一番大きな影響を与えることが分かりました（これら超低周波領域には、地球の大地と電離層の間の共鳴周波数として知られているシューマン周波数や脳波も含まれています）。

生命の発生当時は、太陽からの変動が大きく、地球の電離層も現在とは大きく違うため、この超低周波は雷などの放電を発生させるほど大きなエネルギーを発生させていたと推測されています。そして、この雷が地球上に、生命の基礎となる有機物を蓄積したと考えられます。生命が発生し、進化していく上でも、常にこの超低周波の波動と共存してきたのです。また、地球磁場が反転する周期と種の絶滅が同期して繰り返されていることから、種の絶滅は隕石が原因ではなく、地球の活動の変動に伴う超低周波電磁場が大きく変動したため、この変動に耐えられなくなったものが絶滅したと考えられます。従って、生命は生き抜くために、この超低周波の波動に非常に敏感に反応することが必要なのです。

三、地磁気を感知する生体磁石

以上で説明したように、地磁気（〇・五ガウス）や超低周波の波動の変動は、生命の危機に関連しているため、生命は種々の方法でこの情報を感知する能力を発達させました。

例を挙げると、バクテリア等には体内に、鳩は脳の内部に磁石があり、磁気変動を感知しています。人間の場合には、脳下垂体の前方に位置するところに、磁気器官がある

ことが分かっています。脳の器官で一番磁気に敏感なのが松果体なので、鳩と同じように人間の場合にも、磁気器官から松果体が何らかの方法で情報を収集していることが予想されます。

トカゲや蛙や鳥類などの場合には、松果体の原型が第三の目として日周期などを感知しています。人間の場合には、第三の目は松果体として、脳の内部に取り込まれ、直接太陽光を受光できなくなりましたが、網膜からの刺激のみではなく、地磁気の周期により、日周期を感知して、メラトニン、セラトニンなどのホルモンの分泌をコントロールしています。この地磁気に対する感受性は、地磁気程度の強さに敏感なため、人工的に地磁気程度の磁気を人体に当てることで、メラトニンの分泌量を制御することができます。

四、電磁波による実証された様々な症状

＊　低レベルのマイクロ波を受けた時に、白内障、ダウン症、脳腫瘍の症状が報告されています。また、マイクロ波は、パルスにすることで超低周波として放射することができます（まさにこのパルス波が千乃の車にどんどん来るのです！　強いとうなり音が聞こえるほどです！　傍点は千乃）。

＊　超低周波（送電線からの電磁波を含む）の被曝により、ストレスによる癌、精神障害、精神不安定からくる自殺、鬱病、脳腫瘍、免疫機構の低下が多くなることが報告されています。他にも、遺伝子や細胞分裂時での異常も報告されています。特に、ニューヨーク州の調査は注目すべきで、幼児癌の二〇％は、わずか三ミリガウス（〇・〇〇三ガウス）の電磁波を送電線から受けたためだと正式に認めています（九七年四月号エル・ランティ様のメッセージ参照）。

＊　一九七六年、超低周波を神経細胞に照射したところ、カルシュウム・イオンが放出されたという報告があり、詳しく調査された。その結果、0～一〇ガウスの磁気に晒された状態での生体内のイオン（リチュウムイオン、カルシュウムイオン、ナトリュウムイオン、カリウムイオン）の共鳴周波数が測定されたところ、約一五〇ヘルツ以下で共鳴することが分かった。この通りやはり、超低周波の波動は、生体内で共鳴を起こすため、悪用すれば様々な症状を起こすことが可能なのです。このことが、スカラー波攻撃にも応用されていると考えられます。

五、補足資料（高磁気による症状）

以下で紹介する実験結果は、四で説明したような生体に効率的に電磁波を作用させる原理を理解していない人が行

なった実験のため、電磁波の照射が無く、地磁気の数千倍高い磁気のみの影響の元で行なわれた実験で、生体に影響を与えるには非常に効率が悪く、少し的外れな実験なのですが、磁気の効果としては重要だと思いますので、補足資料として追加しました。

例えば、スカラー波攻撃＝超低周波電磁波被曝＋スカラー波被曝と考えると、このスカラー波被曝の磁気圧による部分の解明の助けになるかもしれません。

一般的には、弱い磁気では成長が促進され、強い磁気では成長が阻止されることが分かっていますが、磁気をかけるのを止めて、しばらくすると元の状態に戻ってしまいます。また、非常に重要なことですが、静止磁気（時間的に変動しない磁気）の場合は、多くの細胞はしばらくすると慣れてしまい効かなくなる場合が多いのですが、ところが交流磁気（時間的に変動する磁気）の場合は、生体が時間的な磁気の変化に対して敏感に反応するようで、大きく影響します。以下の実験では、〇・六ヘルツ～一〇〇ヘルツくらいの磁気の三角波（横軸を時間軸、縦軸を磁気の強さとした時、三角形の形をした磁気パルスが定期的に放射されます）での実験です。

＊　腫瘍

腫瘍は正常細胞に比べて、電荷量が三〇％も多いため、正常細胞よりも磁気を感じやすくなっており、腫瘍に磁気をかけると、腫瘍の成長が妨げられます。つまり、生体エネルギーが常に循環されているところは、その活動が妨げられてしまうことになると思います（逆に中性化することで、影響を受けにくくなります。現在の先生の状況を説明しているのではないでしょうか）。（でもあまりに愚かでエゴイストのキャラバン・メンバーや正法者のボランティアが私をS波漬けにするので、天上界エネルギーもあまり効果は上がっておりません！　千乃）

しかし、磁気をかけた後、磁気を無くした場合、磁気をかけない細胞と同じように腫瘍の成長は促進します。〔家庭の主婦で（正法者の御家族が多い）ガンによる死亡が多いのは、常に攻撃の対象とはされておらず、散発的な攻撃と、送電線を介して侵入する超低周波の電磁波とS波によるストレスなのでしょうねえ。　千乃〕

＊　酵素

加水分解酵素は働きが促進され、それ以外の酵素は抑制されます。従って、様々な生体の機能が狂ってきます。

＊　松果体

脳の中では一番磁気を感じるところで、光の受光や体内

時計や成長に関連しており、他にもメラトニン等の重要なホルモンを分泌します。このメラトニンの分泌が八〇％～四〇％も減少してしまうので、生体内のホルモンバランスが不均衡になってしまいます。

＊　マウスの実験によれば、磁気の影響はメスよりもオスの方が影響されやすく、若いほどその影響が大きいとのことです。

追記　O―157大発生の原因の考察

人間とO―157は、同じようにスカラー波被曝を受けているのに、人間の免疫機能が低下するのなら、O―157の毒性も低下してよいのではないでしょうか。そうすると、O―157の大発生はなかったことになります。

ところが、大方の本では、磁気の影響の元ですべての生物が不安定になってしまうのではなく、磁気の環境に慣れてしまい平気で生活できるものがいることが実験で確かめられており、この実験結果を基に、スカラー波が原因だということを隠そうとしています。確かに、スカラー波の量が少ないときには、O―157のような細菌は非常に短い時間で世代が交代するので環境に慣れてしまったのか、もしくは人間の体内に入り込むことでスカラー波被曝から免れたのかもしれません。しかし、自然破壊を起こすような環境ではこの説も意味がありません。（恐らくそうですね!!　千乃）

想像ですが、四で説明した方法により、ストレスを蓄積し、人間の免疫機能を弱らせ、一方でO―157を活性化させるような攻撃を行なったので（※）、人間の免疫機能は低下したが、O―157の毒性は低下しなかった。従って、相対的にO―157が強くなり病気が大発生したと考えられます。つまり、このような生体実験には、AIDSやO―157の前例の経験を活かして、今後とも十分注意する必要があります。（※　しかしそこまでは考えていないと思います。　千乃）

六、まとめ

以上では、一般書の内容を調査した結果を報告しました。超低周波の波動を日常的に被曝した場合、長期的なレベルでの障害が発生することが分かります。また、生体物質固有の共鳴周波数（0～約一五〇ヘルツもしくは一〇〇〇ヘルツ）は、周期の磁気の大きさにより変化するので、この変化を考慮した上で、生体物質固有の共鳴周波数の電磁波を照射することで、生体に様々な障害を発生させることができることが分かりました。

一方、生体に効率的に電磁波を作用させる原理を知らなければ、五の実験のように数千、数万ガウスの強力な磁気をかけないと症状が発生しないことが分かります。つまり、左翼ゲリラ達はこれらの研究をとっくの昔にやりとげ、実用化していたことになるのです。

この電磁波に、スカラー波が相乗された場合、磁気圧やイオン密度が高くなることを考慮する必要があります。それから、一般の人の中でスカラー波による一番の被害者は、免疫の弱い子供、老人、病人であり、スカラー波被曝の恐ろしさを一番理解している我々が、一般の人に訴えていく必要があります。

参考文献『生物物理』、『クロスカレント』新森書房

註　文中傍点は千乃による。この効率的に電磁波を作用させる――のが恒常的に漏電を誘発し、且つS波の効果を持つコイル状、ループ状の電圧機が各所に効果的に取り付けられている違法工事と、更に周辺のアンテナ工作で送電線から漏れる電磁波と重力波及びS波の合成波が常に周辺に拡散、滞留する仕掛け――。これが大掛かりな電労の違法工事の目的であり、策謀であるのでしょう！　何という大胆不敵な集団による犯罪でしょう。道理で最近の病原菌感染者は（結核、肺炎、風邪！　喘息、心不全、ガンのウィルスなど）、呼吸器系と酸素欠乏による病状悪化から死亡につながる症例が、O―157などの腸炎から腎不全、そして尿毒症になるケースの裏側で着々と実績を上げているはずです!!　医学者はこの現実から目を逸らさず、送電線からの重力波や電磁波被曝の原因排除をまず行うべきだと思います!!

（千乃）

三、電流を互いに逆の二方向に流した時に発生する重力子の説明

『JI』九七年四月号のミカエル大王様のメッセージの「電流を互いに逆の二方向に流し、その外側に磁場が生じると、更にそこに重力子が生じる。それが低周波やマイクロ波の位相をずらし、人為的に作り上げたS波と同型のものである……」という内容と、さらに、科学班のリーダーと千乃先生と天上界の間で検討された「スカラー攻撃がこの

まま続けば、地球の軌道がそれて金星よりになる」という内容の大まかな説明について、自分の理解できた内容を補足説明という意味で、投稿しました。星間条約に何らかの関連があるのではないかと思います。

一、基本知識

＊磁気（図1．1）

磁石にはNとSの二種類があって、NとSは互いに引き合い、NとNもしくはSとSは互いに反発します。通常、磁気はNから空間中に放射され、Sに向かって走り続けた後、Nから放射された磁気は、Sに吸収されてしまいます。ですから、磁気の方向は、NからSの方向で、大きさは磁石の強さに比例します。

＊電流（図1．2）

プラスの電気を持った物質（プラスイオン）は、プラス電極から放射されると、マイナス電極にまで走ります。このプラスイオンの流れを電流といいます。ですから、電流の方向は、プラスからマイナスの方向で、大きさはプラスイオンの密度と速度に比例します。

また、マイナスイオンが、マイナス電極からプラス電極まで走る場合の電流の方向は、マイナスイオンの流れと逆方向になるので、注意して下さい。

＊右ネジの法則（図1．3）

電流の流れる向きに対して、右ネジの方向に電流を囲むように磁界が回転します。このように電流の流れる向きと、その時に発生する磁気の方向との関係を右ネジの法則といいます。

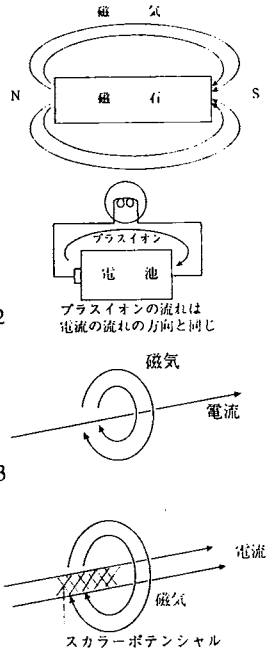


図1.1
図1.2
図1.3
図2

二、互いに平行な導線に同じ向きに電流が流れるときの説明（図2）

さて、互いに平行な導線に同じ向きに電流が流れると、

両導線からの磁気は、両導線の外側にはこれらを包むように磁気が合成されます。一方、両導線の間では磁気の方向が逆のため、方向が打ち消されてしまいます。

しかし、この方向を持たない磁気（すなわち、スカラー電磁ポテンシャル＝スカラーポテンシャルまたは重力子は、表面上磁気の性質は消えてしまいますが、磁気の性質を内在しており、元の磁気に分裂させることが出来ます。例えば、プラスイオンとマイナスイオンを結合させると、表面上電気的に中性になってしまいますが、内部構造としてプラスとマイナスの電気を内在しています。）の部分には、次々と電線から磁気が放射され続けるため、電流と共に移動しながら分解されて、磁気として広がっていく。（特に、磁気の性質を内在させたスカラーポテンシャルが、電流と同じ方向に流れて波動のような状態の様子を、重力波といいます。つまり、スカラー電磁ポテンシャル＝スカラーポテンシャルまたは重力子が、その電磁気的な性質を内在した状態で運動している様子のことです。）

電流を大きくしていくと、両導線がお互いにくっつくように移動します。この引力の原因として、一般の物理では（両導線間にスカラーポテンシャルが存在することは無視されていて）、両導線の外側に磁気が現れるため、この磁気圧により両導線がくっつく様な力が現れると説明しています。

ここで、この現象を、スカラーポテンシャルを使って説明してみることで、以下のように重要な性質が明らかになります。両導線間ではスカラーポテンシャルが大きく、一方両導線の外側（磁気が現れている所）では、スカラーポテンシャルが小さくなっています。つまり、中心のスカラーポテンシャルの大きな所から周囲に向けて、スカラーポテンシャルが流れ出そうとして、渦を巻くために、磁気が発生します。また、両導線はくっつこうとすることから、スカラーポテンシャルはその中心に向かって集まろうとする性質があり、このため引力が働くと考えられます。

また、同じ量のスカラーポテンシャルなら、小さな所に集中した方が、より強い磁気が現れることも理解できます。従って、スカラーポテンシャルが何かに（人体も含む）蓄積されると、その性質から集まって集中することで、その周囲に大きな磁気が現れてしまいます。

二―一　神経細胞への影響（図2．1）

神経軸に沿って電流が流れるため、神経軸の中心にスカラー波が集まり、軸の周囲に大きな磁気を発生させる。このため、適度な量のスカラー波は、神経細胞の成長を促す

と思われますが、その量が多くなると、神経に流れる電流が流れにくくなり、軸の周囲の磁気が強くなると、軸索の成長方向及び結合方向は磁気に左右されるため、障害が発生すると予想されます。

細胞にはガンのように無制限に増殖する機構とは逆に、不要になった細胞が自然に死ぬための機構が備わっており、この機構の乱れがアルツハイマー病の原因だとすれば、スカラー波攻撃により脳内の磁気バランスが壊れたことにより進行しやすくなるのかもしれません。

三、互いに平行な導線に逆向きに電流が流れるときの説明（図3）

この場合、両導線の外側では放射される磁気の方向が逆のため、方向が打ち消されてしまいます。つまり、磁気の放射の代わりに、スカラーポテンシャルがどんどん生成され、放射されているのです。ミカエル様は、この状態のことを重力子と表現されたのだと思います。

電流を大きくしていくと、両導線がお互いに離れるように移動します。この斥力の原因として、一般の物理では（両導線間にスカラーポテンシャルが存在することは無視されていて）、両導線の内側に磁気が現れるため、この磁気圧により両導線が離れる様な力が現れると説明しています。

ここで、この現象を、スカラーポテンシャルを使って説明してみることで、以下のように重要な性質が明らかになります。両導線間では、磁気が現れて両導線間の中心ほどスカラーポテンシャルが小さくなっています。一方、磁気が打ち消されている外側の方がスカラーポテンシャルが大きくなっています。スカラーポテンシャルは一番大きい所を中心として引力が働くため、導線の外に向かって力が働く。つまり、スカラーポテンシャルの小さな所には斥力（逆引力＝反引力）が働くように見える。

また、このスカラーポテンシャルは、互いに逆向きの磁

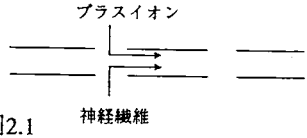


図2.1

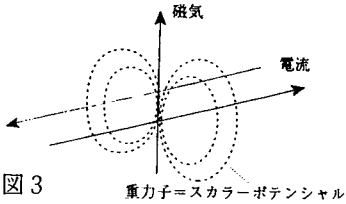


図3

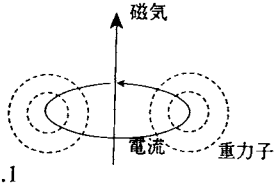


図3.1

気を内在させているため、壁などにぶつかり衝撃を受け、逆向きの磁気が分裂して、元の磁気の性質が現れるため、磁気圧の増加やイオンの量が増えることも予想されます。（どのような衝撃を受けると分裂し易いのかについてはさらに考える必要があります。）

三―一　血管と細胞について

血管に流れる血液の場合、血液はプラスとマイナスのイオンが同じ量だけ含まれながら、同じ一方向に流れています。そこで、プラスとマイナスのイオンを同じ方向に同じ量だけ流すと、互いに平行な導線に逆向きに電流を流している時と同じ形の磁気分布及びスカラーポテンシャル分布になります。

つまり、血管内部の部分部分では磁気が発生し（スカラーポテンシャルが小さく）、血管の外部では磁気が打ち消し合い（スカラーポテンシャルが大きく）なっています。従って、プラスイオンとマイナスイオンの間に斥力（逆引力）が働くため、血管は膨らむような力を受けていることになります。

一方、血管と血管の間はスカラーポテンシャルが大きいので、つまり細胞の内部ではスカラーポテンシャルが大きいため、引力が働き収縮するような力を受けている。また、スカラーポテンシャルが大きい所の周囲（細胞壁）には、取り囲むように磁気が発生している。しかし、細胞が球形のため磁気は互いに打ち消し合い、内部に隠れて表面上には現れない。

スカラー攻撃により、体内にスカラー波が蓄積されると、体内のスカラーポテンシャルの大きな所（細胞）に集中するようになり、細胞は更に圧縮され、血管は更に膨張する。ここで、スカラー攻撃の振動数に応じて、細胞の形が変形すると、内在していた磁気が現れる。このため、細胞間に電磁誘導による電流が流れようとして、細胞壁が絶縁破壊を起こしてしまう。つまり、体の弱い部分では出血するようなことにもなりかねません。他にも、体内の諸機関や、化学結合に影響することも予想され、人体への悪影響が懸念されます。

三―二　円電流の場合（図3．1）

ここで、円形の導線に電流を流した場合に応用してみましょう。電流は円を循環しているので、円の対局同志では互いに逆向きの電流が流れることになります。

従って、円の中央に円に垂直に右ネジの方向に磁気が現

れ、円電流の外側では磁気が打ち消し合い、スカラーポテンシャルとして拡散してゆきます。また、反対向きの電流なので、この円形電流には膨張するような力が働きます。

スカラーポテンシャルの小さな所を中心として、スカラーポテンシャルが渦を巻きながら、中心を貫くように磁気が現れている形になります。

三―三　地球と太陽の関係

円形電流に発生している磁気を地磁気としてとらえ、スカラーポテンシャルの渦を地球の自転方向と考えれば、地球のスカラーポテンシャルの様子が浮かんできます。（実際は、地球の円電流はマイナスイオンなので、三―二の円電流の方向とは逆になります。）　地球の場合、地球の外側から重力波を吸収し、その幾分かを磁気や電磁波として、残りの部分を重力波として再び宇宙空間に放射しています。つまり、重力波の収支としては、電磁気的な変換が行われている分だけ赤字になっているため、この赤字分だけ太陽との重力に対して、反重力が働いている。

そこで、スカラー波を地球に蓄積するとどうなるかを以下の二通りに分けて考えてみましょう。

＊スカラーポテンシャルが地球の中心に余分に蓄積された場合

円電流の中心はスカラーポテンシャルを電磁気的な力に変換しているため、この部分にスカラーポテンシャルが蓄積されると、その変換を阻止するようになり、円電流の量が小さくなる。従って、余りにこの影響が強いと、自転がおかしくなり、地磁気が弱まり、反重力が弱くなるため、磁気ジャンプを起こす可能性があります。また、反重力が弱くなるので、太陽の方に移動してしまいます。（逆に、反重力を強化することで、太陽系外に漂い出てしまうような事も、可能だと思います。）（現在『ニュートン』誌などで言われている単なる磁気ジャンプの為の地磁気の弱まりではないことに注意！　最近キャラバンの上空にＵＦＯが現れなくなり、地球上空全体にもＵＦＯ現出のニュースが減っているのは、反重力航法の為、現地球上でＵＦＯが飛行し難いし、事故も起こり易いのでしょう。宇宙人はやはり地球人より先んじて種々先端科学知識と技術が豊富ですから――。　千乃）

＊スカラーポテンシャルが地球の周辺に余分に蓄積された場合

太陽と地球の間に引力が働いているのは、この中間にス

カラーポテンシャルが集中しようとしているからなので、地球上のスカラーポテンシャルが多くなれば、当然その分だけ太陽との引力が大きくなり、余りにその量が多いと、太陽の方に移動してしまいます。　また、このようにスカラーポテンシャルが蓄積されると、電気的な振動や、地磁気の振動に伴い、スカラーポテンシャルが内蔵している磁気圧が表面化し、地球の表面及び内部の調和された電磁気的な形が変形されて、その変形を修復するのに、電磁気的な気象現象や地震などの地殻の変動が多発することが予想されます。

一方、地球のスカラーポテンシャルが大きくその形や分布を変えると、極端な場合、地殻の構成成分比が変わることにでもなれば（つまり逆重力が働かない構造）、地球環境の復元は不可能になるのではないでしょうか。このような、文明途上による他の恒星系惑星全体の文明の破壊は、これまでも繰り返されてきたのだと思います。（只、現在の地球ほどの無知で無謀で短時日の破壊ではないはずですが――。と天上界で言われます。　千乃）

右記のように、現在の地球にスカラー波を余分に蓄積することは、現状極力さけなければならないのに、多数の人工衛星を使ったディジタル放送などが進められていますが、これは地球を電磁波で包み込むことになり、不自然なスカラーポテンシャルを蓄積するため、以上で考察した地球の破壊をどんどん進行させることになると考えられます。

また、ＵＦＯの場合、機体の周囲が輝いているのは空気をイオン化している、もしくはイオンを発生しているためだと仮定すると、ＵＦＯがその周囲から重力波を吸収し、その重力波を電磁気的なものに変換することで、反重力を実現していることが推測されます。この方法以外にも反重力を発生させる方法はあると思いますが、自然環境に一番影響の少ない方法でないと、地球の崩壊につながります。

三―四　太陽系の場合

もし、地球がその軌道を離れ、太陽に近づくことになれば、どのようなことが起こるのでしょうか。少し極端かもしれませんが、スカラーポテンシャルを満載した地球が太陽に衝突すると考えてみましょう。当然、太陽に核曝発が起こり、これが起曝剤となり、太陽の核融合が極端に増強され、いっぺんに曝発するようなことにでもなれば、太陽系だけでなく銀河系にも少なからず影響を与える可能性もあります。

四、電線に右巻きコイルを巻き付けたときの説明（図4）

電線に流れている電流は時間的に電流の方向が入れ替わる交流なのですが、四と五については理解しやすいように直流で説明しています。

右ネジの法則により電流を取り囲むように磁気が発生します。電流が進むと、電流から放射される磁気は、電線に巻き付いている右巻きのコイルに沿って進むような形になり、電流と磁気の方向は同じ方向に進みやすくなります。

生体の有随神経には、エミリン鞘という絶縁性のコイルが巻き付いており、同じ働きをしていると考えられます。

五、電線に左巻きコイを巻き付けたときの説明（図5）

しかし、左巻きのコイルだと、コイルに沿って磁気が進むと電流の方向と逆の方向に進むことになり、電流の方向と磁気の方向にアンバランスが生まれ、スカラーポテンシャルが電線に沿って移動しづらくなり、コイルの周囲に蓄積され、漂うようになります。

そのような状態の時に、スカラー波攻撃が通過すると「互いに平行な導線に同じ向きに電流が流れるときの説明」から、漂っているスカラーポテンシャルが、攻撃のスカラー波に集中してしまうのです。

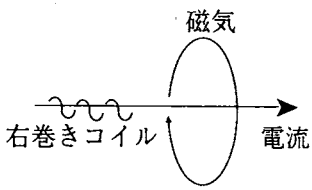


図4

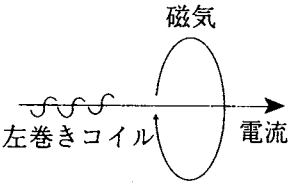


図5

「二、低周波磁気に被曝している現実」についての追加情報

千乃先生が正法者の女性とガンについて推測されましたが、その推測の正しさについての資料がありましたので報告いたします。

松果体は、脳の中では一番磁気を感じるところで、光の受光や体内時計や成長に関連しており、地磁気の周期により、日周期を関知して、メラトニン、セラトニンなどのホルモンの分泌をコントロールしています。つまり、明るいとき（起きているとき）は少なく分泌し、暗いとき（眠る

とき）には、その量が多くなります。

一方、電線などから放射される電磁波は、夜間も止むことなく放射され続けている。このため、夜間に松果体で作られるメラトニンは、これらの電磁波によってまるで光を受けているように感じて、メラトニンを分泌しなくなってしまいます。メラトニンが分泌されなくなると、脳下垂体から女性ホルモンがたくさん放出されるために、乳ガンが多くなることが報告されています。最近日本での乳ガンの発生が上昇しているのは、食生活だけでなくこのような環境汚染が原因だとの報告があります。

『ガンと電磁波』の著者はその中で〝「ナンシー婦人が乳ガンで、夫はアルツハイマー病では、まるで電磁波被曝一家だな」と思った〟と述べており、ゲリラからの攻撃を受けていることを物語っています。

また、（麻酔攻撃のヒント？）では脳下垂体と松果体から分泌されるホルモンの一部について説明していますが、スカラー波攻撃によりホルモンの働きが抑制されているように思われます。

追記：　正法者の方が翻訳されたベアデンの著書の中に、ガンについて興味深い記述があり、紹介します。

〝体が酸素不足になると、細胞は酸素が少なくても生きていけるような体環境へと遷移する。例えば、タバコを吸うと体内で酸素不足になり、力が抜けてリラックスできる。それでもまだ対応できないときは、嫌気性の時の遺伝子が発現してしまい、ガン細胞へと発展する。〟

（麻酔攻撃のヒント？）

松果体は地磁気程度の強さに敏感なため、人工的に地磁気程度の磁気を人体に当てることで、メラトニンの分泌量を制御することができ、メラトニンの分泌が八〇～四〇％も減少させてしまうことが出来ます。

参考にした本には記述されていなかったのですが、メラトニンを減少させることが出来るなら、同じような方法で、人工的にメラトニンの分泌を促進させることが可能なはずです。この方法こそ、眠い眠い攻撃のヒントになるのではないでしょうか。実際、出版社で売られている「金針菜一番」はメラトニンをたくさん含んでおり、眠たくなるので運転前には服用しないで下さいとの注意がありました。

そこで、睡眠に関して調べてみたところ、眠るのは大脳で、その眠りを支えているのが大脳以外の部分だとのことでした。また、睡眠により「細胞毒の解毒／細胞膜の損傷や細胞死を防ぐ／細胞分裂を行う」などが分かっています

が、残念なことに、睡眠の引き金の決定的な原因などは明確にされていませんでした。しかし、左記のホルモンが睡眠に関係していることが説明されていたので（スカラー波が「細胞毒」と認識されて解毒の意味で眠らされているとしたら、有効ではないのですが）、麻酔以外の攻撃によりこれら覚醒時に増えるホルモンが抑制され、麻酔攻撃では睡眠時のホルモンが増えると推測しました。（素人の私でも理解できる範囲で、攻撃に関係ありそうなものに関して、その働きについて説明しています。）

素人なりの結論として、麻酔攻撃の対処方法として、日周リズムの回復方法として、B12が利用されているため、B12の多く含まれているものを十分に補給する。また、眠くなったときには、緑色の光を見たり、レモンの香りをかいだりする。（副腎皮質に対する対処方法が分かりませんでしたので、医学の知識のある方、是非教えて下さい。）

＊B12は、成長／増血／神経系の健康維持に有効な水溶性ビタミンで、肝臓、チーズ、魚介類に含まれています。

＊レモンの香りは、眠気さまし に効く。

〔睡眠に関連するホルモン〕

（ホルモン名）	（分泌器官）	（睡眠時）	（覚醒時）
メラトニン	松果体	＋	－
レニン	腎臓	＋	－
成長ホルモン	脳下垂体	＋	－
副腎皮質刺激ホルモン	脳下垂体	－	＋
プロラクチン	脳下垂体	＋	－
黄体形成ホルモン	脳下垂体	＋	－
甲状腺刺激ホルモン	脳下垂体	－	＋

＊松果体

赤色をしており、目と同じ様な光を感じる色素があります。

メラトニン活性酵素についてのニワトリでの実験では以下の通り、緑色を照射されたときに、メラトニンが抑制されています。

五〇〇ナノメートル～五五〇ナノメートル）	完全に抑制される	緑（四九〇
四〇〇ナノメートル	抑制が弱い	
六〇〇ナノメートル	更に抑制が弱い	

＊副腎皮質刺激ホルモン

脳下垂体から分泌され、副腎皮質に作用して、副腎皮質ホルモンを分泌させる。

副腎皮質ホルモンは、ストレスがたまるとたくさん分泌されストレスを緩和しています。

従って、抑制されると、ストレスに対する抵抗力が低くなります。攻撃による抑圧が、脳下垂体なのか、副腎皮質なのか素人では判断できません。

そこで、医学の知識のある方で有効な対応方法を教えていただけないでしょうか。

また、このホルモンは体内のナトリューム、カリュウム電解質濃度を調整しているため、これらの濃度が抑制されると、脳の活動や生体の活動率が低下するのではないかと思われます。

＊成長ホルモン

眠りが深い時にたくさん分泌されるホルモンで、子供では文字通り成長を司り、大人では古い細胞を新しい細胞に入れ替えなど活性化させます。

従って、抑制されると体が活性されなくなります。

＊視床下部や脳下垂体には、睡眠中に性ホルモンを増強してそのバランスを整える働きがあります。特に女性の複雑な生理（産後のものを含む）を支えています。また、男性は女性よりも単純ですが、生殖的なところを整えています。

（註　文中傍線は千乃による。）

参考図書

ヒトはなぜ眠るのか　（筑摩書房）

脳に眠る「月のリズム」（KAPPA　SCIENCE）

体の手帳　（BLUE　BACKS）

四、スカラー波の原子内部での性質についての一考察

スカラー波が原子に進入した時、様々な推理をまじえ、スカラー波が原子核から受ける影響及び原子核や電子がスカラー波から受ける影響を追求することで、以下に説明するような様々な性質が理解できます。

一、電磁波と電子・陽電子についての基礎知識（通常の物理）

＊陽子（P）と電子（e）は電気的に引き合う。（図1）

陽子はプラスの電気を、電子は陽子と同じ量のマイナスの電気を持っていて、このプラス電気とマイナスの電気の間に引力（引き合う力）が働きます。

＊水素原子（図2）

重力により、地球の周りを月がグルグル回っているイメージと同じで、水素原子の場合には、電気的な引力により、原子核（一個の陽子）の周りを、一個の電子がグルグル回転しています。

＊反粒子

電子や陽子には、質量が同じで、電気量が反対の反粒子が存在しています。

例えば、電子（電子の質量はm、電気量はマイナスq）の反粒子は、電子と同じ質量で、電気量が反対（プラスq）のため、陽電子と言われています。この電子と陽電子は、電子と陽子と同じように、電気的に引力が働きます。

陽子に引かれた電子は、原子核の周りをグルグル回り水素原子を作るのですが、電子と陽電子の場合には、衝突して電子と陽電子が無くなり、その代わり電子と陽電子の全エネルギー量に見合うだけの二個の電磁波が放射されます。つまり、電子や陽電子のような物質が、二個の電磁波に変換されてしまいます（電子と陽電子がぶつかって電磁波に分解されてしまうことを、対消滅と言います。図3）

＊対消滅とは逆の現象として、陽子のすぐ近くのように強い力が働いている所で、二個の電磁波がぶつかると、電子と陽電子が生成されます。（図4）

ただし、二個の電磁波は、電子と陽電子の全エネルギー以上のエネルギーを持っている必要があります。（以下、対生成と言います。）

＊通常は、原子核の近くでは、対生成を発生するほどエネルギーの高い電磁波が、進入すると、対生成が起こり、電子と陽電子が発生しますが、これらは互いに引き合うため直ぐに対消滅してしまい、元の電磁波に戻ってしまいます。

図式で書くと以下のようになります。

二個の電磁波がぶつかる
←
原子核の強い力で、電子と陽電子が生成される
←
電子と陽電子がぶつかる
←
二個の電磁波が生成される

二、対生成／対消滅のスカラー波による説明

電子や陽電子は本当に小さな球状の粒と考えられるので、地球が自転しているように、自転しています（この自転をミクロの場合にはスピンといいます）。電子と陽電子の自転は、互いに逆方向で、同じ強さの自転をしています。従って、電子と陽電子の自転を合成すると、自転は0になってしまいます。

一方、電磁波には右巻きと左巻きの電磁波が存在していて、右巻きと左巻きの電磁波を正面からぶつけたり、同じ進行方向から重ねたりして、スカラーポテンシャルが生成される状況としては、下記の二通りしかありませんが、〈方法1〉が現在考えられる方法です。

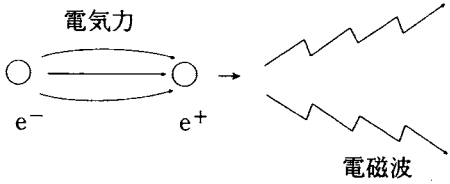


図3

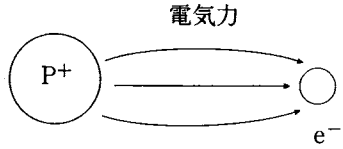


図1

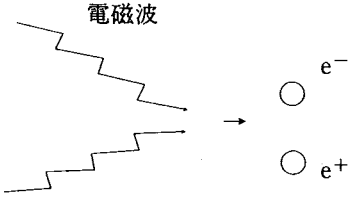


図4

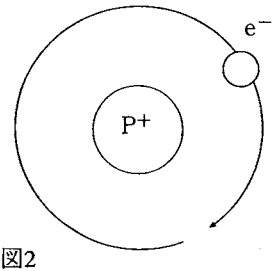


図2

〈方法1〉：同じ進行方向の同じ回転方向の電磁波二個を、一八〇度位相を違えて重ねる。この場合生成されるスカラーポテンシャルには、電磁波の回転方向により、右巻きと左巻きと、無回転のものが存在できます。

〈方法2〉：通常の電磁波は右ネジの法則にしたがって運動しますが、偶発的に右ネジと左ネジの電磁波が正面からぶつかると、スカラーポテンシャルが生成されます。

対生成で発生する電子と陽電子の合成自転は0なのだから、対生成を起こす二個の電磁波の自転は、〈方法1〉だと合成する前は二なのですが、合成すると0となります。

そこで、実験的に一八〇度位相の違う電磁波を重ねると、互いに平行な導線に逆向きに電流が流れる時と同じように、この二個の電磁波のエネルギーに相当したスカラーポテンシャル（二個の電磁波を内蔵している）が生成されます。

今誕生したばかりのスカラーポテンシャルは、原子核の強い渦巻きの力により、押し流され、互いに反対巻きの渦が二個生成されます（この渦が電子と陽電子です）。――このことは、グルグルかき混ぜられたコーヒーの中に濃いミルクを入れると、ミルクがコーヒーの渦に押し流され、塊だったミルクが渦を巻き様々な変化を見せてくれるのと、本質的には同じです。ただ、渦の力の度合いが違うだけです。――

そして、この逆巻きの渦は、原子核の強い渦の中で、互いに弱め合いながら、つまり電磁波を発生させながら、消滅してしまいます。この消滅は、陽子が重力波を分解して電磁力として放射しているのと同じ機構です。

（電磁波に分解できなかった分のスカラー波は、原子内に蓄積されて、原子内の自浄作用により、地球の場合だと雷や地震等々の電磁気的な現象を発生して解消されるか、さらに蓄積が進んで解消できない時には、核の回転が一時的に停止したり、更に逆回転することがあり得ます。また、この逆回転現象が持続するようだと、原子核内の中性子が陽子に変換する可能性もあります。――よく、スカラー波がカルシュームをカリュームに変換すると言われています。また、この核変換が、拡大されると、地球規模の環境破壊につながります。つまり、原子核内に進入したスカラーポテンシャルについても、右記と同じ様なことが起こると予想されます。対生成するのが、電子や陽電子ではなく、もっと重たい物質なだけです。――

原子内部に蓄積されたスカラー波が引き起こすこれらの

現象は、地球／太陽系／銀河系へも適応することができて、以前にも説明したのですが、下記のような人工的な状況が推測されます。

地球→地磁気の消去／地磁気の逆転と磁気ジャンプ／自転の停止や逆転／地球軌道の逸脱

太陽系→太陽磁気の消去／太陽磁気の逆転と磁気ジャンプ／自転の停止や逆転／太陽系の混乱

銀河系→渦を巻かなくなる／逆渦になる／銀河系の混乱

文明途上で、スカラー技術による戦争などで、正常な銀河が渦を巻かなくなった文明もあるかもしれません。尚、そのような銀河は、現在の天体観測では非常に若い星団に分類されてしまう。）

図式で書くと以下のようになります。

二個の電磁波がぶつかる

←

スカラーポテンシャルが生成される。

←

原子核の力により電子と陽電子が生成される

←

電子と陽電子が核の周りを回転することで、二個の電磁波に分解する

←

二個の電磁波が生成される

三、スカラー波攻撃と対生成は同じ現象

スカラー波攻撃では、攻撃源で二個の電磁波を合成してスカラー状態にした物が、飛び込んできて体にぶつかり、身体に吸収されてしまうことが起こります。

我々の身体は突き詰めれば、陽子と電子で構成されているわけですから、対生成の場合との違いは、二個の電磁波が飛び込んで来た後、スカラーポテンシャルを作るか、電磁波ではなく直接スカラーポテンシャルがスカラー波として飛び込んでくるかであり、本質的に同じ事です。違いを、図式で書くと以下のようになります。

［対生成の場合］

二個の電磁波がぶつかる

←

スカラーポテンシャルが生成される。
←
原子核の力により電子と陽電子が生成される
←
電子と陽電子がぶつかる
←
二個の電磁波が生成される

［スカラー波攻撃の場合］
ゲリラがスカラー波生成
←
スカラー波攻撃
←
人体内に吸収
←
一部スカラー波分解
←
二個の電磁波が生成
←
電子や化学物質が吸収。体内の化学反応に影響

四、スカラー波の分解と人体への影響

次に、スカラー波が人体に進入してきたときの様子を簡単に説明します。

体内には、プラスやマイナスに帯電した化学物質があったり、また細胞内部にはマイナス電荷が蓄積され、その外部はプラスに帯電しているため、細胞膜や特に神経細胞膜のような絶縁材は、通常の私達の生活環境からでは異常に強い電気力が働いています。

この様な体内に、対生成するほど強力でない電磁波を内蔵したスカラー波が進入した場合、体内にスカラーポテンシャルが蓄積されます。このスカラーポテンシャルの一部は、体内の強力な電気力により、右巻きと左巻きの渦を発生しますが、（おそらく対生成させるほど強力ではないと思います）対生成を発生させるまでのエネルギーがないので、これらの渦は互いに弱め合いながら、電磁波を放射すると考えられます（S波攻撃により、先生から放射される大量のエネルギーの正体だと思います）。

この放射された電磁波は、その波長により、体内の化学物質や電子に吸収されてしまい、特に「酸素などの反応性の強い物質への影響／化学反応への影響／神経を含む細胞

膜の電位への影響」が考えられます。

例えば、右巻きのスカラーポテンシャルだと、電子が活性化され、体内の化学物質のイオン化が促進される。また左巻きのスカラーポテンシャルだと、逆に電子の活動が阻害されたりする。特に、ヘモグロビンに含まれる鉄は磁化され易いため他の物と比較すると非常にスカラー波を呼び込みやすいので、攻撃が左巻きの場合には鉄の電子が非活性化されてしまう。このため、通常だと鉄の電子を酸素に与えることで酸素と結合できるのですが、この結合が弱くなることが予想され、呼吸を行う生き物は酸欠状態になってしまいます。

〔補足〕

私が生体に関しては専門家でないため、攻撃による脳下垂体や副腎皮質についての対処方法を紙面上で問い合わせたところ、返答が帰ってきました。そこで、電話にて内容を伺い、教えて貰ったところ、その内容が重要だと分かりましたので、報告します。

ベアデンのレポートや研究所からの報告により、スカラー波はカルシューム（Ｃａ）をカリューム（Ｋ）に変換する働きがあることが報告されています。一般に、人体内でＫが増加し、Ｃａが減少すると、副腎皮質ホルモンが増加しますがそれでも押さえきれないときには、心臓に負担がかかり、不整脈などの症状が発生することが分かっています。――高Ｋ状態は、血液を調べれば直ぐに発見できますが、不整脈と難聴くらいしか臨床的な症状としては現れないとのことで、非常に見分けにくい症状とのことです。ですから、スカラー波攻撃を受けていても、素人では発見できなくて、本人としては少し心臓の調子が悪いくらいしか分からないのかもしれません。――

以上から、スカラー波攻撃においても同じ症状が起こると考えられます。しかも、副腎皮質ホルモンは、正常なら、日周リズムに合わせて増減するのですが、攻撃により、食事の時間を不定期にさせられたり、眠れなかったりすると、この日周リズムが壊れてしまい、攻撃を受けたときに副腎皮質が正常に反応できずに、つまりホルモンを増加できずに、心臓が停止してしまうようなことも起こるのではないかと予想されます。つまり、効果的に心臓への攻撃を繰り返すことが出来るのです。――若い反共の優秀な方々が亡くなられている原因とも考えられます。

また、ステロイドホルモン（副腎皮質ホルモン含む）と

ヘモグロビンの関係について、「臨床栄養」（Ｖｏｌ．１８８　Ｎｏ２．１９９６）に興味深い報告があり、以下手紙の内容の抜粋を写しました。

そこで、Ｋの増加とＣａの低下への対応として、Ｋの多い物は余り取らないようにして、特にＣａについてはしっかり摂取する必要があります（高Ｋ状態の緊急対処として、Ｃａを注射することで高Ｋ状態を抑制することが出来ます）。

また、ビタミンＢ６を少し多めに取ったり、また、甘草などの副腎皮質ホルモンに似た成分の物を摂取することで、カリウムをすばやく排出させる（ナトリュウムを備蓄）こともできます。しかも、ヘモグロビンと酸素との親和力の調節を行っているとのことなので、スカラー波攻撃による体内の酸素不足への抵抗力になることも予想されます。

追記：通常ストレスには、ビタミンＣが有効なので充分に摂取し、不足しないように注意することも重要です。

（手紙の内容の抜粋）

ビタミンＢ６の新たな生理機能として、ステロイドホルモンの作用発現の調整に、遊離ＰＬＰ（ビタミンＢ６の関連物質）が関与しているとの報告。酸素運搬体であるヘモグロビンとの相互作用による酸素に対する親和力の調節や血液凝固の遅延などがＰＬＰの作用として示唆されている。

参考：ステロイドホルモンには、男性腺ホルモン、女性腺ホルモン、副腎皮質ホルモンがある。

ストレス時には、副腎皮質ホルモンが多量に分泌されるため、ビタミンＢ６が必要です。

参考：ビタミンＢ６は腸内細菌により生産されるため、通常は欠乏症は起こらない。

（傍線部は千乃による）

五、スカラー波が消えれば海も山も甦る

このタイトルは、ブルーバックス『森が消えれば海も死ぬ』という名著があり、これをモジッタものです。海に住む生物の繁栄は、森との共存の上に初めてしっかりと築かれるものであり、森の破壊による被害者は、森の住人だけではなく、その森が育てている河川や海にまで決定的に影響することが、無機物（鉱物）と生物の複雑な生態系につ

いて極めてよく説明されています。是非一読をおすすめします（スカラー波による環境汚染が如何に大問題かが理解できると思います）。

今回は、『森が消えれば海も死ぬ』の資料を参考にしつつ、スカラー波が森と河川や海に与える影響を考察し、本誌120ページにある「梅の谷池・谷川池」の死滅の原因を追究しました。この死滅は他人事ではなく、陸上に住む生物すべてに対しても時間の問題だけなのです。

先生・天上界が常々おっしゃられているように、自然界の破壊がもう間近に、しかも確実に迫っているのではないかと思います。

一、スカラー波の基礎知識

先生が度々言われているように、スカラー波は電子を不活性化する性質がある（「スカラー波の原子内部での性質についての一考察」参照）。また、磁気を帯びやすい物ほどスカラー波を呼び込み易い。

つまり鉄などは他の原子に比べて原子レベルでの磁化が強力なため、鉄の電子が不活性化し易い。また、酸素分子も磁化されやすい性質があります。

つまり、鉄や酸素の電子が不活性化されるため（化学反応は原子の電子の活性度合いにより反応の度合いが大きく左右される）、鉄や酸素が関係する化学反応は不活性化されるということです。

二、森と河川・海の生態系

森の木々の働きとして、光合成をして有機物を生産し、その時に一緒に生産される酸性の物質が溶媒となり鉱物を細かくし溶かし込んでしまいます（生物風化）。そして、雨や地下水により、腐葉土（森の枯れ葉や生物風化による鉱物資源）が、河川や海に流れ込み、水に住む生物達に栄養素を補給します。森は単純に保水だけの働きではないのです。

この森からの有機物は、水の中に住む空腹のバクテリアやゴカイの餌となり、森と同じように有機物を分解するときに森で風化された鉱物は、更に分解されてしまいます。

次に、腹一杯になったバクテリアやゴカイを植物プランクトンが餌にして増殖し、これらを餌とする「動物プランクトン／貝／カニ／小魚」が群がり、これらを捕食する鳥などの大型の動物が集まってくることになります。

そして、これらのプランクトンや大型の動物等の糞や死体がバクテリアにより分解されるという大自然の循環が行われています。まさに、共存共栄の姿だと思います。

森の木々＋太陽の光
←
有機物の生産＋有機物を生産するときに出る溶液に鉱物が溶け込む（生物風化）。
←
雨や地下水により、有機物や生物風化された鉱物が、河川や海に流れ込む。
←
バクテリアやゴカイの餌となる
←
植物プランクトンの増殖
←
動物プランクトン／貝／カニ／小魚の増殖
←
大型の動物が生息

糞や死体

三、水の生物に必須な鉄と藻の働き

河川や浅瀬の海には、大量の藻が生息しています。この大量の藻は、太陽の強い光から魚を守ったり、魚が卵を産み付けたり、外敵から身を守るための快適な魚の住処となっています。この藻なくして、魚は生息できません。

森を伐採したために、少しの雨で地盤が緩み、森による生物的な風化を受けない砂利や土砂が河川や海に流れ込むと、藻が死んでしまい、魚が寄りつかなくなってしまいます。長く続けば生きた海から死の海に変貌してしまいます。このような例が日本には沢山あります。

河川や海に住むバクテリアから大型の魚までが、生きていくためには有機物だけではなくて、人間にミネラル分が必要なように、たくさんの種類の大量の鉱物が必要です。これらの鉱物は、水の中ではイオンとして存在しており、藻や魚はこれらのミネラル分を簡単に補給することが出来ます。

ところが、光合成や呼吸に不可欠な鉄だけは例外で、鉄イオンでは吸収できないので、森の生物的な風化を受けた鉱物資源（鉄を含む）から、バクテリアが有機物を分解するときに生産する溶液によりフルボン酸鉄が生成され、プ

ランクトンや藻に取り込まれて、光合成や呼吸が出来るというわけです。

四、鉄不足で死滅する河川と海

藻は緑ではなく、黒緑に近い色をしています。この黒は鉄の色で、鉄がなければ死滅してしまいます。実際、鉄不足で光合成が出来ずに、つまり藻が増殖できない海として、アラスカ湾／赤道域／南極海等が有名です。

これらの海域への鉄の供給は、大陸から吹き付ける風の中に土砂が混じっており、この土砂の中に含まれる僅かな鉄により供給されるのです。

しかし、藻が増殖し、豊かな河川や海の場合、光合成や呼吸に不可欠な多量の鉄は、どこから供給されるのでしょうか。地球上にある鉄はほとんどが酸化されていて、このままではプランクトンや藻が取り込むことが出来ません。生物が取り込むことが出来るのはフルボン酸鉄だけなのですから。

最初に、森にある酸化鉄が森の風化を受けて、雨と共に流れ込んできます。次に、バクテリアなどが森から流れ込んできた有機物を分解するときに生産する溶液により、この鉄が分解されてフルボン酸鉄になるのです。つまり、森からの鉄の供給がないと、鉄不足により河川や海は死滅することになります。従って、森が死ねば、河川や海も死んでしまいます。

特に、森林伐採により有機物と鉱物資源が海に流れ込まなくなると、白いペンキを塗ったような白い世界となり、陸の砂漠同様に草木一本もない死の世界となってしまいます。この白い物は石灰藻といわれ、この藻が覆った岩や岩盤には他の生物は一切生存できない。この状態を磯焼けと言います。

五、スカラー波攻撃と河川や海の死

河川や海の生体は、森から供給される有機物だけでなく、無機物により生死が決まることを説明しました。特に鉄に関しては、フルボン酸鉄の供給が無いと、藻が光合成出来ず、生息できないため、魚が生息できなくなることが分かりました。本誌のP120に紹介されている「梅の谷池・谷川池」の場合を考えてみましょう。

通常夏だと、森の活動が盛んで、森からの資源の供給が多くなるのと、池の底と水面での温度差が大きいため、地底に溜まっている鉄を含む腐葉土（酸素の含有量は少ない）が、対流により掻き混ぜられて水面まで拡散されます。通常は水が十分な酸素を含んでいるため、これら酸素の少ない腐葉土が水面まで拡散しても、養分として吸収できるので、藻やプランクトンが繁殖できるのです。そして、池の水が濁ります。

おそらく、この池は河川による水の出入りが少なく、周囲のスカラー波を含んだ水などが入り込み易く、スカラー波をため込むと放出できないような地形なのだと思います（琵琶湖や諫早湾も同じ）。

このため、一度スカラー波が蓄積すると、外界とのつながりがないので、スカラー波を放出できず、特に鉄はスカラー波を吸収できるだけ吸収してしまい、電子が不活性化してしまった。そして、光合成に必要なフルボン酸鉄の供給が少なくなり、アラスカ湾の様に藻が酸素を供給できなくなった。もしくは死滅した。これも手伝って、水の中の酸素量が減り、かつ赤血球の酸素結合が悪くなったため、魚が生きてゆけなくなってしまった。貝やエビも同じだと思います。（さらに、海底に溜まった死骸は腐らず酸素不足の状態で沈殿しており、これが夏のあつい太陽による水面と海底の温度差により、海底に溜まっている酸素不足の死骸が対流により水面まで拡散してくると、赤潮の原因となり、酸素不足のため魚が大量に死んでしまいます。）

〔補足〕　植物は、地球から放射される重力波の流れと回転方向に応じて、成長しているため、重力波の流れが整えられ、その整えられた重力波の中で動物が生きてゆけるのだと思います。

〔補足〕　地球の核には、鉄に代表されるような強力な磁石の性質をもつ金属が大量に存在しています。

これらの金属の電子が不活性化すれば、地球の自転により電子が発生していたマイナスの分の磁気がなくなるので、地磁気が無くなってしまう。この地磁気は、宇宙や特に太陽からの有害な宇宙線をカットしていたのですが、無くなってしまうと生体に有害な宇宙線が地上に降り注ぎ、生物は生存できなくなります。

更に電子が全く不活性化して地球がプラスに帯電した場合、プラスに帯電した地球の自転による磁気が現れ、地磁気が逆転する。地磁気の逆転は、歴史が示すように、生物

の大量絶滅と関連しています。

〔補足〕　日本テレビで平成九年九月一日のＡＭ０時15分に放送された「海がおかしい・愛媛真珠母貝大量死」というドキュメント97が放映されました。最初の大量死は昨年の今頃発生し、磯焼けの件と、死んだ貝から腐敗臭がしないことや、海底に溜まった死んだ貝が腐らないことが報告されていました。原因不明の大量死であり、真珠貝の養殖場の近くで養殖している河豚の寄生虫を消毒するために使用するホルマリンが、一番怪しいというような結論でした。どうも、Ｏ―157の時の「カイワレ」と同じで、原因究明をやりたくないような報道に受け取れてしまいました。つまり、マスコミは敵なのです。

この大量死の原因は、スカラー波攻撃による酸素不足と、ダムによる森林からの有機物と無機物の流れ込みが無くなったことが助長したことによると思います。

しかし、死んだ貝が腐らないところから、バクテリアが死んでしまった。つまり生態系の一番底辺が今崩壊しており、地球規模になれば二度と生命は生まれない。本当に恐ろしいことだと思います。

六、スカラー波の人体への影響

動物は、食物を消化し、体内に吸収された鉄は骨髄が保管し、この鉄を利用して骨髄で赤血球を生産しています（赤ちゃんは、肝臓／腎臓でも生産している）。この百日くらいの寿命の赤血球は、呼吸と共に体内に酸素を取り入れ、二酸化炭素を体外に排出しています。そして死ぬと肝臓は胆汁と共に腸に排出し、便となって体外に出てゆく。

骨髄は赤血球以外にも、白血球を生産しており、骨自体はカルシュームと燐の管理をしています。つまり、体内でカルシュームが不足すると、骨を削ってカルシュームを提供し、カルシュームが余ると骨に貯蓄する働きがあります。しかも、余り知られていませんが、骨を叩くと電気的なパルスが発生して、そのパルスが骨の隅まで伝わるような電気的に活発な性質があります。逆に、スカラー波による電磁的な現象が発生すると、骨に不要な圧力が加わる可能性があります。―圧力を加えると電気が現れる性質は、圧電効果と呼ばれ、石英や水晶にも現れます。―

従って、スカラー波が体内に蓄積されると、「骨髄（骨全般）／肝臓／腎臓（副腎皮質含む）」に対する機能障害が起こると考えられます。

パラダイムシフトを起こす

水谷俊夫

S波の問題は現象的にも、精神的な意味でも地球の存続に関わる大問題である。

広くS波の概念やその武器としての恐ろしさ、また平和利用すれば文明をもすばらしいものに一変させることに気づいてもらうことが必要である。と言うより、人類の課題であると思う。

S波の問題は公共機関に無視されて久しいが、理解を阻むもっともな要因がある。(結果には原因が存在する)

一時代の支配的な物の見方、特に科学上の問題を扱う際の前提条件である共通の体系的な想定をパラダイムと呼ぶが、この言葉を用いると以下のパラダイムがあるからである。

1. 電磁波は横波である。
2. 重力理論は電磁理論と切り離されて存在している。
3. 測定にかからないものは、ないものと見なす。

本稿では、主に前述1に触れてみたい。

まず、現代の一般的な認識は、次の通りである。

電界及び磁界の振る舞いを表したマックスウェル方程式を解けば、電界及び磁界が振動する向きは、波の進む方向に垂直という結果になる。即ち、電磁波は横波であろうと予言される。さらに、この波の速度まで計算でき、その結果、約三〇万km／secと算出される。一方、ヘルツによる実験結果もほぼ同じ値であった。これで、現証、文証、理証

全て揃い、電磁波は存在する、それは横波である、ということになった。（文献[1]、[2]）

この科学史上のドラマは、電気と磁気がめでたく統一され、電磁波の存在が明らかになり、電気文明の礎になったこととして、当時としては、人類の歴史上まれにみるパラダイムシフトであった。

さて、電磁波の縦波はどうなったのであろう？

残念ながら、電界と磁界のみのマックスウェル方程式を解く限り、縦波解は出てこない。また、実験で縦波と特定できる現象も発見されなかった。こうして、電磁波の縦波は表舞台から消え去っていく。

その後の展開をざっと垣間見ることにする。

量子力学や素粒子物理学の分野では、クーロン力（＋と＋、－と－は反発し合い、＋と－は引合う力のこと）が電磁波の縦波あるいは縦成分から生まれることは常識となった。（文献[3]）電磁波の縦波や縦成分は、量子力学や素粒子物理学の分野では仮想光子に分類されている。「仮想」と付けば、非常に短い時間に限って存在することを意味する。即ち、「仮想」ではあるが、実在するものという認識である。

一方、古典となった電磁気学の分野でも、クーロン力は静電スカラーポテンシャルを用いて計算する。（文献[1]）また、クーロン場を分解した波の場は、波動ベクトルの方向に向いているので、縦波と呼ぶことができる。（分解した波の振動数は0、即ち波は振れないと説明している。）（文献[4]）

但し、古典電磁気学ではあくまでも数式上こうなる、ということのみを述べ、実在性には触れない。

仮想粒子では、一mのような長距離（粒子の世界ではこれは長距離である。）の間存在を保てないし、古典論では計算上の概念と見なしている。従って、一般社会では存在は無視されることになった。

しかし、ここで二つはっきりしたことがある。

一つは、現代物理上、仮想粒子としてであるが、電磁波の縦波の存在を認めている、ということである。もう一つは、電磁波の縦波と、スカラーポテンシャルの話の関連性が、でたらめなソースから湧き出てきたのではなく、むしろ学説を辿れば当然の帰結ということである。

さて、現代のパラダイムから言えるのは以上の所までであるが、私には何やら消え去ったはずが、出番を待ってい

るように見えた。

そんなことを考えている最中、K様からおもしろい文献を頂いた。一九〇三年にホイッテッカーが書いた論文である。

数式上ではあるが、以下のシステムが厳密に示されていた。

様々な波長の球面波（こちらは振動する普通の波）の重ね合わせにより、一つ一つの波は時間的に変化し、進むのだが、重ね合わせた全体は時間的な変化がなく、振幅は場所のみに依存する。その波は縦波であり、重ね合わされた全体はスカラーポテンシャルを構成する。

つまり、電磁波の縦波とスカラーポテンシャルの存在は二〇世紀の始めに予言されていたことになる。

しかも、球面波とスカラーポテンシャルの汎用論なので静電スカラーポテンシャルのみでなく、例えば重力ポテンシャルにもそのまま適用できる。（文献[5]）残念なことにこの素晴らしい統一理論は、その後どうも廃れてしまったらしい。しかし、廃れたことと間違いであったことは天と地ほどの差がある。

今日、現代物理の分野で最も引用回数が多いと言われるヤン・ミルズ場の論文は、発表時には、パウリから内容について猛烈な不満を表明されている。（文献[6]）根本的な問題ほど、人々がその重要性に気づくのに時間がかかるということであろうか？

なお、厳密には、ホイッテッカーの論文は現象面の記述が弱く、自論の検証がない。現象面の記述としては、ジオルコフスキーのスカラー波方程式の解及びその図解がある。この紹介は次回投稿に譲ることにする。

以上のような文献を軸として、様々な文献を調査することで地盤固めができる。さらに専門家と協力すれば独自の実験も可能である。

さて、掲題の「パラダイムシフトを起こす」ことについては、重要な側面がもう一つある。シフトを起こすには、パラダイムを変えてしまうことが不可欠である。科学の場合は、矛盾のない理論構築と検証によって成し得る。理論は、定量的であることが要求されるので、一般的には数式による表現となる。しかしながら、一般社会にまでパラダイムシフトを起こすには、一般社会に及ぼす影響の大きさを伝えることも重要であると考える。一般に難しい数式は当然見向きもされない。別の活動が要求される。

大橋正雄氏の波動性科学（これは難しいが）や、その応用商品や、医学博士による臨床結果などを紹介すると共に、積極的にこれらの人々とネットワークを形成することは一つのよい進め方と思われる。お互いに、様々な意味で学ぶところが大きいと思う。

もちろん、天上界・千乃先生の示唆するところを噛み砕いて把握して、行動の指針としなければ、迷路に陥るか、中途半端に終わり、悪の勢力に利用されてしまうことになる。

完遂しなければ、ひっくり返される。科学上のことにも見えるが、実は総合的な戦いである。私は、二〇世紀初頭に解き残した宿題を、今突き付けられているように感じている。

参考文献

[1] 電気学会編 「電気磁気学」 オーム社

[2] 藤井保憲著 「統一理論」 学習研究社

[3] ディラック著 「現代物理学講義」 培風館

[4] ランダウ、リフシッツ著「場の古典論」 東京図書

[5] ホイッテッカー著「On the partial differential equation of mathematical physics」 Mathematische Annalen Vol.57 p.333 ～355 1903

[6] L・オラファティ著「ゲージ原理の発展」 数理科学 一九九七年二月号P15～20 サイエンス社

カナダで起こっている水鳥の不思議な大量死について

小泉万馬

九七年十月三日の朝日新聞（夕刊）に掲載されていた、カナダで起こっている水鳥の大量死の原因を、「スカラー波が消えれば海も川も甦る」を元にして追究してみました。

◆　記事の概要　◆

米国との国境のほんの近くで太平洋側に位置するマニトバ州にあるホワイトウォーター湖（東西一五キロメートル、南北五キロメートル、一番深い所で三メートル）にて、昨年夏に、カモ／チドリ／カモメなどの水鳥が十万羽以上も死んでいた。今年も一日百羽以上が死んでいる。

カナダの国立水質研究所の調査によれば、湖水はほとんど無酸素状態で、鳥の死骸や体についたウジからボツリヌス菌のCとD型が検出された。このCとD型は人に対する毒性は無いが、鳥／牛／馬／ミンクなどの家畜が中毒を起こす。ボツリヌス菌は無酸素状態で発育・増殖し、致死率二〇％以上の強力な神経毒素に中毒すると、めまいや舌のもつれ、手足の麻痺が起き、呼吸が出来なくなって死亡する。

同研究所の上級研究員によれば、同湖は元々火山台地にあってリン濃度が高いうえ、水深が一番深い所で三メートルしかない湿原状の湖。そこへ周囲に牧場が増え、肥料や糞を含んだ水が流れ込んで富栄養化が進んだ。しかし、ボツリヌス菌は無酸素化が進めば、何処でも同じような事態になる可能性がある。

カナダ水鳥愛護協会などのボランティアが毎日、湖をボートで回り、死骸を回収している。同協会は「鳥の死骸についたウジがボツリヌス菌に汚染され、そのウジを別の鳥が食べて死ぬ、という悪循環が起きている」という。

補足：日本では、浜名湖くらいの面積。但し、浜名湖は一番深い所が一二・二メートルのため、体積としては数倍以上大きい。……『理科年表』より

一、ホワイトウォーター湖についての推測

この湖は河川による水の出入りが少なく、一度水が入り込むと、水が抜け出せないような環境で、さらに悪い事に底が浅く、全体の水量が少ないため、一度環境が汚染されると回復できにくい地形です。このような地形の元で、湖の周囲が牧場などになり開発されたため、おそらく木々が切り倒され、今まで供給されていた鉱物資源が供給されなくなってしまった。そこで、水藻による光合成が減少し、湖水内の酸素量が減った状況だった。一方、牧場からの肥料などが流れ込み微生物が大量発生した。

記事によれば、湖水はほとんど無酸素状態で湖面はどろどろと濁り、湖が腐っているという感じという事なので、湖水の微生物が大量発生し、酸素不足により、大量に死滅した。微生物の大量の死骸には酸素が少ないため、小さな湖はこれが広がると赤潮と同じようになり、次々と酸素不足で生物が死んでいったと推測されます。

しかし、このような水鳥の大量発生は今まで発生したことがないので、以上で説明した地形的なものや開発によるものだけが原因ではないのではないでしょうか。そこで、日本で蓄積されているスカラー波との関連が無いかどうかを左記で説明します。

二、海流／風によるスカラー波の影響

―海流―

日本海側の海流は、一年中大陸から日本の方に流れ込んでいます。一方、日本の太平洋側には、北海道から関東へ流れ込む親潮と九州から関東へ流れ込む黒潮が関東でぶつかり、太平洋に流れ出し北太平洋海流となり、そのままアメリカ大陸にまで運ばれ、ぶつかります。この海流は、北上するアラスカ海流と南下するカリフォルニア海流に別れる。この北太平洋海流がアメリカ大陸とぶつかる所のそばにホワイトウォーター湖は位置しています。従って、日本の沿岸のスカラー波を含んだ海水は、これらの海流に乗ってアメリカにたどり着き、この辺りは火山活動が活発な、つまり電磁現象が活発な地域でもあるため、スカラー波はこの海域一帯に蓄積されてしまう。そしてすこし離れた火山の近くで放散すると考えられます。

まとめると、日本で蓄積されたスカラー波は、海底火山

などの電磁現象の活発な所、つまり放出され易い所から放散され、海流に運ばれ、アメリカの火山地帯に吸収され、ホワイトウォーター湖に蓄積されたと推測できます。

—気圧—

海流が日本からアメリカまで流れているため、これに乗って風も発生しているので、空気中のスカラー波もアメリカに流れると思われます。しかし、太平洋の中心には、夏は高気圧（日本と米国には低気圧）、冬は低気圧（日本と米国には高気圧）が、発生しており、この太平洋に発生している気圧との関係で、日本の風が直接米国に届くとは思われないので、海流による影響が大きいと思います。

三、地球規模の振動によるスカラー波の影響

日本→ホワイトウォーター湖→ヨーロッパ→日本の順番で、地球を一周するような全長（長さLキロメートル）を考えます。面白い事に、北極を上に日本を中心として、右に丁度全長の三分の一の所にホワイトウォーター湖があり、左に丁度全長の三分の一の所にヨーロッパ（英国含む）が位置しています。通常、アンテナから効率よく電磁波を放射させるためには、アンテナの長さの約一・二倍～一・七倍の波長の交流電圧を加えます。同じように、日本に蓄積された余分なスカラー波は、当然放散しようとするため、地球の自浄作用により全長Lのアンテナから効率よく放射できるように調整されてしまい、地球規模のスカラー波の振動が発生してしまうと考えます。この振動は、地球内部に、また地球表面と電離層の間に発生している可能性があります。

従って、この振動の腹（スカラー波の濃い所）は日本なので、ホワイトウォーター湖及びヨーロッパに、スカラー波の濃い所が発生してしまいます。また、ヨーロッパでも大陸にはほとんど火山が無く、英国に火山が集中しているため、英国にたくさん蓄積されているものと考えられます。そういえば、英国では狂牛病が大きな問題となっています。

四、結論

ホワイトウォーター湖の水鳥の大量死は、水の出入りが少なく浅いという地形的な問題、開発による微生物の大量発生と鉄分の不足による湖水の酸欠だけではなく、日本に蓄積された余分なスカラー波が、海流や火山及び地球規模の振動に乗って、ホワイトウォーター湖に影響を与えたと考えられます。

五、天上界へのご質問

太陽の場合、北極→南極→北極で一周すると、N極を上として、太陽の上下方向の表面上の磁気は丁度三波長の振動をしています。つまり、北極と南極の間では、一・五波長の振動をしています。しかし、赤道上では丁度四波長の振動をしています。通常、アンテナから一番電磁波を放射しなく（電磁波を保持する）する波長は、アンテナの長さの約一か二倍の波長の電磁波です。

地球の場合も、太陽と同じように、地磁気のNを上方向として、上下には一・五波長の振動が発生してエネルギーを放射し、赤道方向には二波長の振動が発生してエネルギーを保存しているのが、正常な状態だと思われます。従って、地球が自然の周期として、スカラー波を蓄積している周期と放散している周期が繰り返されているとすれば、放散の期間には、一・五波長の振動が発生してしまう。しかも、この一・五波長の振動が、三波長の振動に移行した場合、この三波長の振動に伴い固定的なNとS極が発生するのではないでしょうか。丁度、太陽の上下方向に三波長の振動が発生していて、固定したNとS極が現われているように。

もし、日本→ホワイトウォーター湖→ヨーロッパ→日本の間で、三波長の振動が発生した場合、現在の南極と北極以外に、N極とS極が発生します。つまり、南極のS極以外に日本にS極が、北極のN極以外に大西洋（アトランティスがあったと言われている）にN極が発生します。そうすると、地磁気は、元の地磁気方向に新しい地磁気方向を加えた方向に変化してしまいます。従って、磁気ジャンプが発生してしまう事になります。そして、磁気ジャンプなどによりスカラー波が、放散されると、元の地磁気のみが残り、傾いた地磁気が元に戻る可能性があります。

このままスカラー波攻撃が続けば、以上のような考察で磁気ジャンプが発生するという考え方は正しいのでしょうか？

＊　＊　＊

理論的にこのような経緯が考察でき得るのであれば、地球人類と自然界の悲劇は避けられないものとなるでしょう。一刻も早く科学陣が世界への警告を強め、スカラー波の乱用、使用を止めなければなりません。まず、日本から先です。

エル・ランティ

シリーズ掲載カラー絵の写真を発売！

現代の聖書、仏典！　大好評のJブックス――お問い合わせは出版社へ

天国シリーズ　千乃裕子編著

未来の幸せをめざして―

天国の扉（改訂版）

再臨の救い主達（七大天使、モーセ、ブッタ、イエス）による最初の正式な証言集。ミカエル大天使の真相を明かす衝撃の書！神とは、霊魂とは何かを徹底的に解明し、天国の実在を証明。（定価一、二六〇円）★英語版、韓国語版、中国語版も発売中！

最後の審判より希望の星へ―

天国の証（改訂版）

再臨の救い主達による第二回目の証言集。人類の救いにいたる最後の審判に対してミカエル、ガブリエル等天使達のメッセージ及び進化論に基づき、宗教と自然科学の一致を立証する。（定価一、二六四円）★英語版、中国語版発売中！

エクソシズムからアトランティス大陸の謎の解明

天国の光の下に（改訂版）

読者の憑依体験、奇蹟の体験寄稿集。編者による霊能、霊界の科学的分析に加えて、環境問題、アトランティス大陸の実証を網羅した傑作。（定価一、三六五円）★英語版発売中！

諸説の真偽を篩いわけ聖書の奇蹟とその謎を解明

天の奇蹟　上1050円、中1260円、下1580円

自然科学の源流を求めて。あらゆる奇蹟・謎を天の示唆を得て解明。

天の危機・人類の危機を迎えて―

天上界メッセージ集（正・続・Ⅲ）

「最後の審判」という大いなる法の裁きの下で、天上界が語る数々のメッセージ。（正）（続）一二六四円（Ⅲ）一八三五円

絶賛発売中　セルメスシリーズ

★希望と愛と光をあなたに　英語版も発売中！

天使の詩（セルメス）　定価714円

天上より三次元の人々への警鐘、そして希望あふれる天使の詩。

★光に生きる人生をあなたに

天使の冠（エルフォイド）　定価819円

天使の冠とは？　天の善しとされる正しさとは？　勇気とは？

★光、光、光の世界をあなたに

天使の群（エルバーラム）　正825円・続924円

地球上の進化とともにあった天上界からの警告。

★天は人の世に破壊をもたらさない

天使の智恵（エルロイ）　定価928円

すべての人々へ愛と希望と勇気を今ここに贈る。

★天は愛と義と智に満ちた人々のために在る

天使の角笛（エルカロム）　定価924円

人類のために天は今、時の流れを変える角笛をならす。

神の怒りと悲しみ　歩紀柚衣著／定価998円

未知の地球史を公表し、〈最後の審判の真実〉を論証！

古代日本と七大天使（神代編）

古代日本歌謡、和歌がヘブライ語の意味を持つ事を発見し訳出！

西澤徹彦著　千乃裕子監修／定価2630円

神々の憂いと悲しみ　天と地のはざまにて　星を仰ぐ―

著者最新の執筆文「神々の憂いと悲しみ」と、最新の天上界メッセージを一挙掲載。反共産主義に立脚し国内・国際情勢に警鐘を鳴らしてきた著者の執筆集「政治編」を網羅！

千乃裕子著　JI編集部編／定価2855円

ジェイアイ出版社　〒150　東京都渋谷区松濤１－４－９　TEL03-5453-1870
サンエルサビル１０１号　振替00110-8-167145